Arendt Platz 創刊によせて

高橋在也（アーレント研究会副会長・千葉大学大学院特任助教）

私は千葉刑務所で受刑者支援の仕事をしている者です。ある日、受刑者の社会復帰支援カウンセラーをしている同僚から、受刑者の「心を癒す」ことと関係がある気がするのだけど……と言われて、一冊の本を差し出されました。それが『人間の条件』（ちくま学芸文庫版）でした。日本で上映された映画をきっかけにカウンセラー仲間のあいだでアーレントが読まれているのだそうです。

受刑者の「心を癒す」ということについては説明が必要かもしれません。受刑者とは、「犯罪行為」（多くは暴力行為）の「加害者」となった結果、刑務所で服役をしている人々です。しかし、かれらの多くは養育された家庭の貧困や崩壊という背景を持ち、愛情もしくはサポートを受けた経験が皆無という方々が少なくありません。それゆえ、受刑者への支援として「心を癒す」とは、かれらの見放された経験と向き合い、その経験の深部に関わることを意味します。

受刑者の「心を癒す」ことと、アーレントを結びつけて考える発想は私にはありませんでしたから、刑務所でのアーレントとの出会いは驚きでしたが、同僚は、受刑者の「心を癒す」という、現場の難問を解く鍵を『人間の条件』に見いだしたのです。

『人間の条件』の中でアーレントは、「人間は別に労働しなくても十分うまく生きてゆける。自分の代わりに他人に労働を強制できるからである。……ところが、言論なき生活、活動なき生活というのは世界から見れば文字通り死んでいる」（同 287 頁）と述べます。この部分が、とりわけ同僚には衝撃的だったそうです。「言論や活動なき生活は、世界から見れば死んでいる」というのは、受刑者の経験そのものだったからです。すなわち、人と人のあいだで言葉を交わして行為し、それをもってかけがえのない「その人」を示せたような経験が欠落しているとは、世界から見ればまさに「死んでいる」経験なのです。世界から、つまり、サポートを受けられる人間関係からも切り離され孤立の中に生きてきた人々は、自らの尊厳を砕かれるような経験を積み重ねた結果、暴力行為へと向かうのだと同僚は言います。そこで同僚は、受刑者の人たちの社会復帰と心の再生のために、世界につながる再生の経験が重要だと思うに至り、「言論」と「活動」の経験を核にすえた「心の回復プログラム」を考案したのでした。

Arendt Platz の創刊号に寄せて、この話を書きましたのは、アーレントの思想や概念が様々な生にまつわる現場の難問や課題を解く鍵になるだけでなく、アーレントの思想や概念の意味を考える様々な試金石を、こうした現場から提出できると思ったからです。そのためには、思想研究と現場の両者が対等に対話できる「場」がやはり求められます。そこで、アーレント研究会を次のようなことを実践する場にしたいと考えています。

【１】アーレントに関する基礎研究・応用研究を推し進め、世界に発信していく。
【２】様々な奥行きを持つアーレント思想の可能性について、アカデミックな枠組みと、それぞれの持ち場で格闘している生の現場との対話から模索する。
【３】よって本会では、人の数だけある専門性の深度を持ち込み、学問的専門性とオープンさを併せ持った議論の場を作っていくことを目指す。

アーレントの思想は、なにか新しい文化を紡いでいきたい、あるいは、人と人との関係性が変わっていくような場をつくりたいと願って活動をする人たちに、そして、なんらかの「場」や「行為」に傷ついて、だからこそ次を模索する人たちに、大きな気づきや発見をくれると思います。*Arendt Platz* が、そうした発見とアーレントをめぐる研究が双方深化していくひとつの場（Platz）となることを願っております。

今号は、8 月に行われた研究大会のシンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」にご登壇いただいた方々からご論稿を、個人発表にて報告された 4 名の方からは発表要旨をご寄稿いただきました。いずれも創刊を飾るにふさわしい力のこもった論考になっております。ここから、アーレントをめぐる議論がさらに深化・発展することを祈念します。

会報名の由来と表紙について

「アーレント・プラッツ（アーレント広場）」の由来は三つある。一つは、今年 2015 年の 4 月にアーレントの生まれ故郷ドイツ・ハノーファーに設置されたハンナ・アーレント・プラッツ（Hannah-Arendt-Platz）である。アーレント研究会もちょうど同じ頃にリニューアルし創設された。近くにはアーレント通り（Hannah-Arendt-Weg）〔裏表紙〕がある。広場はニーダーザクセン州議会議事堂〔表紙〕の前にあって瀟洒で目立たないが、看板下の Hinrich Wilhelm Kopf に意味がある。ニーダーザクセン州知事を務め、ドイツ社会民主党員であった Kopf が戦時中ナチスの犯罪に関与していたことが明らかになり、アーレントの名はこれを断ずる形で掲げられたのである。Kopf の事実はハノーファー市民を落胆させたが歴史を象徴していると言える。由来の二つ目は、歴史的な革命や政治集会の殆どが広場を拠点として行われていること。三つ目は、アーレントが幼少期を過ごした街リンデンのマルクトプラッツ（Marktplatz）である。その名のとおり、アーレントの生家のすぐ目の前の広場では週末になると市場が開かれ、老若男女が買い物袋や籠を片手に集う。カフェ・コーナーもあり、これを目当てにくる人も多い。一人でいそいそと野菜を買ったり、売り手と話したり、カフェで議論したり、何がおいてあるかじっくり眺めたり、恋人と待ち合わせをしたり、広場で人は思い思いに時を過ごして去る。そこは公的な場であると同時に、生活に密着した場であり、個々人の人生が行き交う場でもある。この会報が、アーレントという人物を通じて人々が社会と向き合い、思索や言葉や感性を紡ぎ交わす広場になれば幸いである。（文責・写真：阿部里加）

●シンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」

アンダースとアーレント
——科学・技術をめぐって

提題者：渡名喜庸哲（慶応義塾大学専任講師）

ハンナ・アーレントの最初の夫ギュンター・アンダース……彼もまたフッサール、ハイデガーに学び、その後、ユダヤ系の出自ゆえにドイツを追われ、アーレントとともにフランスに渡るもその後別離し、単身アメリカへと亡命する。その頃、本名のギュンター・シュテルンから、ペンネームとしてアンダース——字義通りには「別の仕方で」——と名乗るようになる。第二次大戦が終わると、ドイツではなくウィーンに居を構えるが、大学からの招聘は断り続け、つねに「在野」にとどまる。「学術」的な著作よりは反核運動をはじめとする市民運動へと身を投じて執筆活動を続けた。近年ドイツやフランスをはじめアンダース再評価の機運がめざましいとはいえ、総じてアンダースがこれまであまり注目されてこなかったことにはそういった事情もあるのだろう。

だが、アンダースの思想は、実に多くの点でアーレントの思想と共鳴しているように思われる。いやむしろ、こと現代社会における「科学・技術」の問題に関しては、アンダースはアーレント以上に具体的で、幅広い哲学的な省察をもたらしているとすら言えるだろう。「アーレントと現代の科学・技術」という課題にとって、アンダースの「テクノクラシー時代の哲学的人間学」を重ねて読むことにいかなる意義があるかを指摘するのが小論の目的である。

1　三人の「ハイデガーの子どもたち」

アーレントと科学技術といえば、誰しもが『人間の条件』（1958）プロローグを思い浮かべるだろう。スプートニク号打ち上げへの言及から始まる同著は、地球という条件に「縛りつけ」られた人間が技術によってなしとげた偉業を讃えるのではない。原子力兵器の開発、オートメーションの出現によっていっそう促進される科学・技術による「世界疎外」の「現代的な不安」を前に、あらためて「人間の条件」の再考を試みようとするのだ。ただ、そこでアーレントは、科学・技術がもたらす帰結を強調しているのであって、科学・技術それ自体を分析の俎上に載せているわけではないと見ることも可能である。現代における科学・技術の進展をただ嘆くのでなく、それ自身を射程に収めた考察があれば、との一抹の物足りなさを覚えないでもない。

脇道にそれるが、アーレントと同年にユダヤ系の家に生まれ、同様にハイデガーの薫陶を受けたフランスの哲学者であるレヴィナスが問題視したものこそ当の嘆きであったように思われる。1961 年に書かれた小論「ハイデガー、ガガーリンとわれわれ」において、レヴィナスは「ハイデガーとハイデガー主義者」による技術・産業社会批判に対して否定的な見解を述べている[1]。レヴィナスが言及しているのはスプートニクではなくガガーリンであるが、いずれにせよ、現代の技術主義の進展による世界の喪失を嘆き〈場所〉への愛着を唱える「ハイデガーとハイデガー主義者たち」への批判を辞さない。レヴィナスにとっては、むしろこうした現代技術こそ、世界という条件からの人間の「解放」を可能にしたものだ。しかもそこには、「つねに場所から自由」であった「ユダヤ教」の知恵に基づ

[1] エマニュエル・レヴィナス『困難な自由』合田・三浦訳、法政大学出版局、2008 年、所収。

く「むき出しの顔」の人間性という、自らの倫理思想に連なる考えすら読み取ることができるとまでいうのだ。

アーレントとレヴィナスの思想を直接対峙させるのはここでの課題ではない。ただ少なくとも指摘しうるのは、二人の相異なる見解は、合わせ鏡のようにして、20 世紀における科学技術についての哲学的な考察の一つの焦点が、まさしく人間と「世界」との関係、もう少し具体的に言うならば、人間が「世界」にいかに「縛られているか」、いかにそこから「解放」されうるかという、人間の「条件」――すなわち、森一郎氏の達意の訳で明らかになったように「被制約性（*Bedingtheit*）」――の問題にあることを示唆しているということだ。

ところで、レヴィナスがギュンター・アンダースとも無関係でなかったことは強調されてよい。そればかりか、30 年代に亡命の地パリでアンダースが発表した二つの哲学論文のうち、一つはレヴィナスその人が翻訳しているのだ[2]。

レヴィナスが訳した論文「アポステリオリの解釈」のなかで、アンダースは、人間に対する世界の「アポステリオリ性」を強調している。すなわち、人間は最初から世界に制約されているのではなく、世界へと事後的に参入するのであって、世界に対して「異他性」を有しているという考えだ。ただし、人間は世界と徹頭徹尾無縁なのではない。人間は世界を「体験」することによりいっそうそれを更新し、そうすることで自ら自身をもいっそう更新するというのだ。アンダースは、人間の「本質」はアプリオリに規定されているのではなく、世界の「経験」によりアポステリオリに「作られる」ということを、逆説的な言い方で次のように述べている。「人工性が人間の性質＝自然であり、その本質は非安定性にある」。本質があらかじめ定まっておらず、世界との関係によって、「人工」的にその本質が作られること、これが人間の「自然」だというのだ。

２　ギュンター・アンダース――テクノクラシー時代の哲学的人間学

ギュンター・アンダースの仕事は多岐にわたるが、一言で言えば、彼こそは 20 世紀のさまざまな「アポカリプス」についての思想家であったと言ってよいだろう。ただしそれは、政治的、宗教的、イデオロギー的等々の観点から「世界の終わり」を声高に言い立てるようなペシミズムではけっしてない。彼のまなざしは、アウシュヴィッツ、ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ……といった、「人間」に端を発するさまざまな「アポカリプス」をめぐり、まさしく「科学技術」の時代における「人間」の「自然」を問うことに向けられている。換言すれば、さまざまな 20 世紀の出来事の体験に基づき、現象学的というよりも独自の哲学的人間学的な観点から、まさしくテクノクラシー時代の人間の条件の変容を描き出しているように思われるのだ。

テクノクラシー時代の人間の条件と言ったのは、一方では、アーレントにおいてと同様、「人間の条件」なるものについての考察がアンダースの著作の全体を貫いているからだ。しかし他方、人間の条件の変容と言ったのは、アンダースは、アーレント以上に、現代の科学技術において、これまで「人間」なるものを支えてきた諸々の条件がいかなる変化を被っているかという問題意識を有しているように思われるからだ。この点については多くの論点をあげることはできるだろうが、ここでは以下の四点に絞り、各々の要点をアンダースの主著作から抽出しておきたい。

---

[2] 詳細は下記拙論を参照。「フランスにおけるギュンター・アンダース」、『国際哲学研究』2 号、2013 年。

１）　「存在の条件」の変容

アーレントとアンダースの意味深い共通点の一つは、両者ともユダヤ人として祖国を追われた経験をもち、現代社会における破局的出来事に対する哲学的な考察を続けているとはいえ、けっして「アウシュヴィッツ」の特権化に与してないということにあるだろう。

わけても「ヒロシマ」と「ナガサキ」はアーレント以上にアンダースにとって決定的であった。1958 年、第 3 回原水爆禁止世界大会に招聘されたアンダースは、焼津、広島、長崎など各地をめぐり、訪問記を残している。ここには多くの示唆に富む考察が見られるが、とりわけ広島で被爆者たちに加害者に対する「憎悪」がまったく見られないことを目の当たりにしたアンダースの、次のような洞察は重要である。

> 行為の下手人と、その被害者とが、たがいに巨大な距離をへだてて存在している結果、後者は、自分がある行為の犠牲者である、という事実を理解することすら、不可能となるだろう。過去においては、およそ「行為の場所」は、同時に、下手人のいた場所であるとともに、犠牲者のいた場所であった。すなわち、行為の主体と客体とは、同一の場所に存在していた。しかし、いまや、この二つの要素は、二つの異なった場所に分かれ分かれに存在するようになったのである。この、分裂の現象が、今日の人間における意識の分裂という現象を決定づける「存在の条件」の一つである[3]。

「行為」は「他者」の存在を前提とする――アーレントならばそう言うかもしれないが、アンダースが見てとっているのは、「原子爆弾」のある世界においては、行為の「主体」と「客体」の場所は、かつてないほど隔たっているという状況である。「主体」は「客体」の――レヴィナスの言葉で言うならば――「顔」を見ることないし、「客体」のほうも「主体」が誰なのかわからない。そしてこれまでの他者関係を基礎づけてきた「存在の条件」の変容こそが「意識の分裂」をもたらすというのだ。「この世界は、一見、シンキロウみたいなながめ、つまり、良心の疑念を感じない殺人者たちと憎悪を知らない犠牲者たちが仲良く住む「天国」でもあるかのようなながめを呈しているのだ」[4]。

２）　「倫理的状況」の変容

アンダースの考察は原爆投下という「行為」の「客体」における憎悪の不在にとどまるのではない。その「主体」の「良心」についての考察を展開したのが、広島への爆撃に加わった米陸軍のパイロットであるクロード・イーザリーとの書簡である。戦後、原爆投下を悔いたイーザリーは、しかし精神異常を疑われ精神病棟に隔離されるのだが、病床の彼のもとへアンダースが送った手紙には、イーザリーその人が置かれた状況についての鋭い考察が見られる。

> 人間存在の機械化ということ、すなわち、いうならば機械の中のネジのように、知らず知らずのうちに、われわれがいろいろな行為のからくりの中へ組み込まれてしまってい

---

[3] ギュンター・アンデルス『橋の上の男』篠原正瑛訳、朝日新聞社、1960 年、114 頁。

[4] 同上、116 頁。この点についてはさらに下記も参照。ジャン=ピエール・デュピュイ「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園：ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ」、日仏会館編『震災とヒューマニズム　3.11 後の破局をめぐって』明石書店、2013 年。

るということ、しかも、これらの行為の結果については予想すら不可能であり、たとえ予想できたとしても、それはわれわれに怖じ気をふるわせる種類のものであろうということ――こうした、人間存在の機械化が、今日のわれわれすべての人間の、倫理的状況を変えてしまったのです。

つまり、機械化の結果、われわれは今日いつなんどき責任がないのに責任を追わせられるかもしれないような状況のなかに生きているのです[5]。

この状況においては、単に人間が「機械の中のネジ」のようになるだけではない。自らの行為について、まったく「予想」ができなくなり、そうして自らの行為の予想を超えた帰結がさらに取り返しのつかない事態をもたらすということだ。ここで問題になっているのは、アーレントが『人間の条件』「活動」章の末尾で述べていたような行為の「予期不可能性」と「不可逆性」だということは十分可能だろう。しかし、アーレントが両者に対し望みを託した「約束」と「許し」をもってしても追いつくことのできないほどに「隔たり」は広がっているのではないか。それほどにまで、われわれの「倫理的状況」は変容しているのではないか――そうアンダースは言いたいかのようだ。雲の下に隠れて見えない「顔」に、レーダーに反応するだけの「顔」に、われわれはどう「応答」しうるのか――アンダースとイーザリーの書簡はそういう問いを発しているという見方もとりうるだろう。

３）「世界」の変容

今見たような、現代産業・科学技術社会において顕著な、自らが為したことの帰結を思い描くことができないという不可能性、行為する能力とその帰結を想像する能力の「落差」のことを、アンダースはことさら強調し、これを「プロメテウス的落差」と名付けている。上の引用にも見られる「人間存在の機械化」はそれと対になっているのだが、この両者があいまって構成する現代世界の「怪物性」――これをアンダースは、「技術的全体主義」と呼ぶこともはばからない。「イェルサレムのアイヒマン」の息子、クラウス・アイヒマンに宛てた手紙には次のように言われている。

怪物的なものを生みだす根源は主として二つあることはすでに予告しました。第一の根源、「落差」についての事情は十分にお分かりになったと思いますので、第二の根源に移れると思います。私たちの生きる今日の世界の機械性（もしくは機構性）という根源です。……そして機械としての世界は、本当に技術的・全体主義的状態のことで、私たちはそれに向かって駆りたてられているのです[6]。

興味深いのは、本当に「怪物的なもの」はけっして「怪物」のような恐ろしい姿をしているのではないということだ。「技術的・全体主義的」な世界は、なんらかの指導者や団体の統率のもと、憎悪や恐怖や、忠誠や奉仕の精神からなるのではない。それは、われわれの感性の域をはるかに超え出ているという意味で、超感性的な世界と言ってもよいだろう。『時代おくれの人間』に言われる「アポカリプス不感症」はそのことを指している。「プロメテウス的落差」ゆえに自分が何をなしているか

---

[5] ギュンター・アンデルス『ヒロシマわが罪と罰』篠原正瑛訳、ちくま文庫、1987 年、35-36 頁。

[6] ギュンター・アンダース『われらはみな、アイヒマンの息子』岩淵達治訳、晶文社、2007 年、73、81 頁。

気付かないような、それでいて全体が「機械」のようにして構成された世界にこそ「怪物」は潜んでいる。そうであるからこそ、「われらはみな、アイヒマンの息子」になりうるわけだ。『全体主義の起源』から『人間の条件』を経て『イェルサレムのアイヒマン』にいたるアーレントの考えとの交差は明らかだろう。「凡庸な悪」の哲学的な意味を検討するにあたっては、アンダースを脇に置くことは不可欠だというのも言いすぎではあるまい。

４）　「人間」の変容

「プロメテウス」という形象にアンダースがこだわるのは、言うまでもなく、「人間」が「技術」の力を手中に収めたとの認識ゆえだ。けれども、――この点でアンダースはきわめてペシミストなのだが――彼は、同じ「人間」が、熟慮や討議等々によって、この「技術」を統御し、その暴走を食い止めるということができるとはほとんど期待していない。一つには、――この点でアーレントと合流する――「人間」が手に入れた「技術」の力とは、全人類の技術的な殺害を可能にする、つまり全人類の「自殺」を可能にするほどの力であり、もう一つには、この状況にあって、もはや「人間」はなんらかの「主体」の位置を手放さざるをえないほど「変容」しているからだ。

> しかし、今日の技術批判に必要な市民的勇気を誇張しないようにしよう。機械批判という問題を引き受けているのがわれわれであることは重要ではない。……今回問題となっているのは、別々の生産段階を代表するものの間でなされている議論では決してない。……現在問題となっているのは生産される製品そのものなのである。それは、たとえば爆弾、あるいはひとしく製品となっている現代人なのである[7]。

もはや、「われわれ」は、技術に外在的な立場からそれに対する市民的批判をなしうる立場にない。アンダースにあっては、人間の機械化や物象化についての素朴な見方はもはや乗り越えられている。ディスプレイを破壊し、チューブを断ち切り、ディスクにドリルで穴を開ければ、生来の「人間」なるものが取り戻せるのではない。「われわれは活動しているとき何をしているか」というアーレント的な問いすらもアンダースにおいては禁じられる。「「われわれ」と言う資格があるのは、実際に秘密を握っているごく少数の研究者や発明家、エキスパートだけ」だからである[8]。むしろ、「人間」はすでに機械に追い越されてしまっている、イノヴェーションを続ける機械に比して「人間」は「時代遅れ＝賞味期限切れ」となっている――この認識こそアンダースにとって決定的な意味をもつ。新鮮さを保つには、「爆弾」、あるいは「製品」とならねばならないのだ。「人間」なるものの尺度があるとすれば、それは人間の「自然」のうちではなく、――30 年代の哲学論文からすでに述べられていたように――「人工性」のうちに求められねばならない。だからこそ、人間がこの新たな世界をどう「体験」し、その「制約」をうけつつ、自らの「本質」をどう更新してゆくか、あるいは、うまく更新できずどれほど「人間」が「時代おくれ」になっているのか、このことを記述しなければならないというのである。

---

[7] ギュンター・アンダース『時代おくれの人間　上』青木隆嘉訳、法政大学出版局、1994 年、6-7 頁。

[8] 同上、30 頁。

したがって、アンダースは、さまざまな「アポカリプス」をめぐって、いたずらに現代産業技術社会を批判することを目的としているわけでない。こうした人間の条件の変容の透徹した把握こそアンダースの「テクノクラシー時代の哲学的人間学」を貫く姿勢であると言えるだろう。

３　アーレントを別の仕方で

かいつまんで瞥見したにすぎないが、それだけでも以上のようなアンダースの思想がアーレントのそれと重なる地点は明らかであろう。とはいえ、両者の差異についても自覚的であるべきであろう。アーレントが試みたものは、「テクノクラシー時代の哲学的人間学」というよりも、『人間の条件』に限って言えば、哲学史の理解に即した人間の活動性の類型論であり（同著 3-5 章）、その系譜学の問い直し（同著 6 章）ということができるかもしれない。書き方にしてもアンダースにはいっそう皮肉のきいた散文的なスタイルが目につき、アーレントのような概念的な考察には馴染まないようにも見える。だが、こと「テクノロジー」に関しては、アーレントを補ってあまりある視座をアンダースは提示していると言うことができる。たとえば『人間の条件』20 節における技術／テクノロジー論、あるいは同著末尾における「工作人の敗北」という議論から、なんらかのアーレントのテクノロジー論を抽出することは可能であろうが、それはアンダースがしたように、具体的な状況との関係に置き直して捉えるべきであるようにも思われる。あるいはさらに、『人間の条件』と『全体主義の起源』や『イェルサレムのアイヒマン』との関連についても――端的に言えば、「思考の不在」と「凡庸な悪」という濫用のきらいのある概念についても――、本稿で紹介したアンダースの視座を介入させることの意義は少なくあるまい。いずれにしても、アーレントの思索の豊饒さをいかすためにも、アーレントを別の仕方で読む可能性をほかならぬアンダースが与えているということは確かであろう。

●シンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」

アーレントとリニア新幹線

――『活動的生』のテクノロジー論から

提題者：森一郎（東北大学大学院教授）

近頃は、「宇宙エレベーター」の構想があるらしい[1]。ジャックと豆の木のファンタジーを軽く超える、大地と天空をつなぐ夢の懸け橋。宇宙開発を推進する側としては、太陽光エネルギーを宇宙空間から地球上に供給できる画期的プロジェクトとして売り物になるようだ。二十世紀の英雄ガガーリンならずとも、つまり宇宙ロケットで大気圏外に飛び出さなくても、このドコデモ昇降機さえあれば、誰でも宇宙へ出かけてゆけるのだ。素人目にも実現は容易でなさそうだし、採算が取れるとも考えにくいが、宇宙への扉がそのように開くと聞かされると、悦ばしい気がしてくる。天国への階段めいた超エレベーターの到来に心躍るわれわれ地球人の体内には、やはり、宇宙人のやんごとなき血が混じっているのだろうか。

他方でわれわれは、土塊（くれ）から造られた大地の卑しい族（やから）であることを免れない。地べたを這いつくばってヨコに動くことを宿命づけられてきた死すべき者どもが、タテの直線移動を行なって天上に昇ろうとするのは、悪あがきにすぎないのではなかろうか。だが、それとは別の悪あがき路線を、わが国の科学技術は世界で唯一突き進もうとしている。リニア中央新幹線プロジェクトがそれである。地中に擬似宇宙空間を掘り抜き、中空を驀進する列車に乗りたがるのも、われわれの内なる宇宙人の血が騒いでいるからであろうか。

以下では、新国立競技場問題に優るとも劣らぬ、それでいてほとんど議論のないまま始まってしまったこの新設計画について、アーレントの視点から立ち止まって考えてみたい[2]。

１　建てることと住むこと

ところで今回、副題に「『活動的生』のテクノロジー論から」と銘打ってみたが、この本の一体どこにテクノロジー論があるのだろうか。

字面だけで見ると、『人間の条件』[3]に、「テクノロジー（technology）」という言葉は、およそ三つの文脈に現われる。まず、第四章「仕事」の第二〇節に出てくる（HC 147ff.）。「テクノロジー」とは「道具を機械に置き換えること」だといわば定義され（HC 147）、テクノロジー発展三段階説が示される箇所である[4]。次に、第五章「活動」の第三三節では、為されたことの「取り返しのつかなさ」を背負い込む活動（アクション）を、赦しの効かない自然界を相手にせっせと繰り広げる「現代の自然科学とテク

---

[1] 大学入試センター作成『試験問題冊子　旧課程科目　理科②』2015 年 1 月、から学んだ。

[2] 本稿は、拙文「リニア中央新幹線について、立ち止まって考える」（『創文』2015 年春 No. 17、所収）の続編である。なお、リニア新幹線への着目そのものは、『朝日新聞』2014 年 2 月 3 日朝刊「ニュースの扉」記事（玉田恵美執筆）の「ハイデガーで考えるリニア新幹線　技術が人間を「かり立て」る」に、筆者が取材協力したことに由来する。

[3] Hannah Arendt, *The Human Condition* (1958), The University of Chicago Press, Paperback edition 1989, The second edition 1998 (＝HC). 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。

[4] このテクノロジー三段階説（蒸気機関と燃料革命→電力と世界の電化→自動化と自然化）と、それに続く「未来のテクノロジー」としての原子力技術については、拙著『死を超えるもの　3・11 以後の哲学の可能性』（東京大学出版会、2013 年）の第 8 章を参照。

ノロジー」の危険性が指摘される（HC 238）。最後に、第六章「活動的生と近代」では、伝統を瓦解させた「制作する人（ホモ・ファーベル）の勝利」がクローズアップされるなかで、「テクノロジー」という語が使われる（HC 287, 289, 295）。

だが、『人間の条件』とりわけ『活動的生』[5]のテクノロジー論は、今挙げた三点にとどまらない。邦訳の索引に明らかな通り、「技術（Technik）」という語は、「序論」冒頭近くから出てくる（Va 8）。『人間の条件』の読者にも、「プロローグ」がスプートニク一号打ち上げから切り出され人工生命やオートメーションを話題にしていることは、よく知られている。第三章「労働」の第一六節でも、「道具を機械に置き換える」という意味でのテクノロジーが問題になっており[6]、「技術」という言葉も出てくる（Va 142）。『活動的生』では、主にテクノロジーという意で用いられる Technik のほか、Kunst――「技術」、「芸術」、「術」と訳し分けざるをえない――も頻出する。芸術創造から政治術まで包含しうるテクネー概念の広がりからすれば、『活動的生』の全体が「技術の哲学」として読み解けるほどである。

さて、「アーレントとリニア新幹線」について考えるうえで、私がまずもって重視したいのは、「労働」と「制作」との初歩的区別である。「労働」が、「消費」と一体をなして際限のない循環運動を形づくるのに対して、「制作」には「使用」が後続し、出来上がった物が使われ続けて人工的世界を形づくる。「作ること」にとっては、「使うこと」が、何といっても重要なのである。科学技術者倫理のケア原則には、「何かを作るうえでは、それが使われ続けてゆくことを、配慮（ケア）しなければならない」が真っ先に挙げられてよいだろう。

リニア中央新幹線を作ろうとする場合にも、肝要なのは、それをどう使い続けてゆくか、である。「とにかく作ることが大事。どう使うかはあとで考え、使えなければ壊せばよい」という発想で事が進んでいるとすれば、それはもはや「制作」ではない。労働生産物が消費されるのと同じ調子で、物作りも消費対象＝消耗品の供給だとされているのである。それにしても、九兆円の工費と三〇年の工期をかけて列島を縦断する大トンネルを掘り抜くプロジェクトが、ポイ捨ての発想で作られるとすれば、これほど倒錯した話もまれであろう。

「働く―食う」の相即が、生命の必然性に規定されているように、「作る―使う」の連繋は、目的―手段のカテゴリーつまり有用性に規定されている。だが、「作る―使う」が有用性に尽きない意味をおびることは、この連繋が、「建てる―住む」の連繋と重なることからも窺える。建築は制作の一種と見なされるが、「建てる―住む」は「作る―使う」の特殊例とは必ずしも言えない。むしろ「建てる―住む」のほうが普遍的だと言えるほどである。「作る―使う」の対象は、さしあたり道具、アーレントの言葉遣いでは「物」だが、「建てる―住む」になると、その相手はもはや個々の道具ではない。われわれは世界を建て、その世界に住む。制作の根本条件が「世界性」――「人間的実存が対象性と客観性に差し向けられて依拠していること」（Va 16）――だというのは、目的―手段連関を超えて永続的に現前し続ける世界あってこそ、制作という人間的営為もはじめて体をなす、ということである。

---

[5] Hannah Arendt, *Vita activa oder Vom tätigen Leben* (1960), Piper, Taschenbuchsonderausgabe 2002 (＝Va). 森一郎訳『活動的生』みすず書房、2015 年。

[6] 『人間の条件』第一六節のテクノロジー論については、「奴隷制問題の消息――〈テクノロジーの系譜学〉によせて――（中）」（東京女子大学紀要『論集』第 48 巻 2 号、1998 年 3 月、所収、https://opac.library.twcu.ac.jp/opac/repository/1/2502/KJ00004475678.pdf）参照。

この「世界」は、「自然」と区別される。人為的世界と区別される自然など存在しない、と指摘しさえすれば、この区別の無効性を証明できると思い込む者もいる。だが、自然に逆らって営々と築いてきた人間的世界が、地震、津波という自然の猛威にあっけなく壊滅させられ、「自然のうちで故郷を失った生活」（Va 16）を送らざるをえなくなった、という経験を通して、われわれは、この区別がいかに重要であるか、心底学習させられたのである。

世界は自然によって危機に瀕するが、人間の内なる自然の現われである「労働する動物（アニマル・ラボランス）」によっても猛攻を受け、掘り崩されてしまう。自然の圧倒的力は、大自然ならずとも、わが身を振り返って小（プチ）自然を反省すればただちに分かる。労働と消費のプロセスの拡大を求めてやまない「総かり立て体制（ゲ・シュテル）」（ハイデガー）、もしくは「世界疎外」（アーレント）の猛威は、五〇年の歴史をもつ旧国立競技場を破壊してしまった。その跡地に建てられるはずの新施設も、同じ勢力の食い物にされる運命に曝されている。では、リニアはどうか。

五年の工期を経てやはり五〇年のあいだ人びとに愛用されてきた東海道新幹線は、制作に続く使用の面での実績により、「物」としてわれわれの世界の一部となった。まさしく「制作する人の勝利」であろう。それと同じ素振りで、今度はリニア中央新幹線が造られようとしている。だがそれは、「制作する人」の装いの下に「労働する動物」がわれわれの世界をむさぼり尽くそうとしている、ということなのではないだろうか。われわれの住む世界には、われわれに続く世代も、末永く住み続ける。その共同世界を破壊する行為は、もはや「建てること」ではなく、国土を「むさぼり喰らうこと」だと言うべきだろう。

２　半宇宙人のおもちゃ

リニア中央新幹線計画は、作って使うこと、建てて住むことからの逸脱だと思われてならないが、それだけではない面がこのプロジェクトには纏綿している。アーレントのテクノロジー論から霊感を受けて拙著『死を超えるもの』でおこがましくも披露した卑見が、「半宇宙人（なまじっかエイリアン）」という現代人観である。この面からリニア問題を呑気に再考してみよう。

人類は古来、大地に棲む生物でありながら、身の程を弁えず、空を飛ぶことを夢見てきた。それを実現したのが、二十世紀の軍事テクノロジーであった。第一次世界大戦中にドイツ化学産業が開発した毒ガス兵器は、第二次大戦中には絶滅収容所（フェアニヒトゥングス・ラーガー）のガス室に粛々と活用され、第二次大戦中にアメリカ軍産学複合体（ゲ・シュテル）が総力を挙げて開発した原子爆弾は、戦後には核兵器正当化と浪費経済護持のために平時利用された。民族絶滅政策と人類絶滅兵器は、その凄まじさからして、人類史が新しい局面に突入したことを告げているかに見えた。だが、大量虐殺が各国で内戦のたびに引き起こされ、核分裂でお湯を沸かす虚無化施設（フェアニヒトゥングス・ラーガー）が地表のあちこちに建てられる光景を見せつけられると、ひょっとしてこれは、「人間ほど凄まじい化け物はいない」と歌った古代のコーラスのぶり返しではないか、と疑いたくなる。

新国立競技場の当初の設計プランと同じく、リニア実験で使われた往年の試作機も、流線形をしており、宇宙ロケットを思わせるスタイルであった。五十年の技術開発の歴史を有するテクノロジーとして、リニア計画は、新幹線や原子力発電に匹敵する由緒をもつ。他方この半世紀に、超音速旅客機や原子力船といった鳴り物入りのハイテクがトラブル続きで廃テクとなっていった。核融合開発や高速増殖炉もすでに廃テク同然となっている。

じつは、リニア開発も同じく廃テク仲間だということを、われわれ日本人は知らなければならない。

3・11 以後も高速増殖炉開発を国策として引っ込めていない技術立国は、リニア技術に関しても、他のすべての国が撤退した今なお、旧弊に固執し続けている。リニア開発が軌道に乗れば他国に売り込めると国内では喧伝しているが、これぞまさしく大本営発表もいいところである。従来型の新幹線で実現可能となりつつある速度を、巨額の工費と想定不可能なリスクを覚悟で求める国が、見つかるはずがない。リニア新幹線を動かす膨大な電力のためには、既存原発の再稼働程度では足りないことも、ほとんど議論されていない。原発推進路線とリニア建設は、同一軌道を動いているだけでなく、リニアを走らせるのは、地球温暖化に次ぐ原発正当化の口実をあみ出すためかもしれないのである。とんだ使い道もあったものだ。

半宇宙人の中途半端さは、原子力の平和利用に如実に表われている。地上に宇宙力を導き入れたはいいが、さっぱり飼い馴らすことができず、さりとて放射能被曝に耐える超人類に変身することもままならない。おのれの棲み処である大地を、地球という一惑星にすぎぬと見下し、別の星に移住することもできそうだと豪語しておきながら、国土に放射性物質がちょっとでも撒き散らされたら、すぐお手上げである。星を観察していた古代の哲学者が足下の穴に落ちて怪我したような、宇宙を故郷と観ずる性（さが）が、リニア新幹線待望論にも見出せるとすれば、人類にひそむ形而上学的動物の本能がそうさせているのだろうか。

だが、そう言うにはあまりに陳腐な中途半端さが、リニア中央新幹線構想には付いて回っている。この新路線は、そのほとんどが地下をくり抜いて作られる。近年作られる新幹線はトンネルが多くて窓外の景色を楽しめないが、起点から終点まで徹底して地底深くを驀進する超地下鉄は、もはや「モグラ新幹線」と呼ばざるをえない（地道な小動物にはハタ迷惑だろうが）。巨費を投じ環境世界を破壊し、要は、地下に拵えた洞穴を電磁力で中空飛行の真似事をするのである。軌道に沿って進んで行くよりも、浮いて走る分、摩擦が少なく高速運転が可能とはいえ、大空を飛び回るのではなく、所詮、細長い人工の横穴を窮屈に滑って進むだけの話である。地下の擬似宇宙空間を遊泳するためだけに、日本列島を傾かせるほどの一大建設事業に打って出るのは、半宇宙人のおもちゃとしては有望なのだろうが、だからといって、そのお遊びに未来世代まで付き合わせるのはいかがなものか。

３　公共の事柄としてのテクノロジー

このように、『活動的生』第六章の「宇宙科学」の話から紡ぎ出せる半宇宙人の物語の、そのまた一挿話として、リニア技術を解することができる。だが、既述の通り、アーレントのテクノロジー論は、この点に尽きるものではない。第五章の行為論も、必要な変更を加えれば、テクノロジー論に転用可能である。「自然へ介入しつつ行為すること（in die Natur Hineinhandeln）」（Va 294, 304, 413）は、二十世紀以来、現代世界の基本動向を決定する要因となっている。今日では、社会に奉公する政治家より、科学技術に邁進する研究者のほうが、世界変革のチャンスに恵まれている。アクションと化した科学技術は、新しい始まりをひらく力能をちらつかせて、現代人を虜にしている。絶滅手段を首尾よく招来したマンハッタン計画以来、巨大プロジェクトの立ち上げは、科学研究者が世界史に参与する王道となってきた。肥え太るあまり、退却どころか軌道修正もままならない官産学原子力総かり立て体制のメタボ症状には、利権や沽券だけではなく、アクションの妖しい魅力が人びとを煽り立てるという内因が無視できない。取り返しも予測もつかない行為の非力さが、自然との関係における人間のあり方に取り憑き、自由とは真逆の呪縛力を末代にまで撒き散らしている。

リニア新幹線が夢や希望として語られるのも、アクションとしての科学技術が、人びとに訴える力

をなお有しているからだろう。史上初といった威勢のいい掛け声を全否定したら、人類の未来に何が残るのか。惰性、停滞、没落よりは、一か八かの賭けに打って出るほうがマシだ。そういう絶望と紙一重のチャレンジ精神が、そこに感じとれなくもない。

ここで気づくことがある。テクノロジーはとっくに「公共の事柄（レス・プブリカ）」となっているのだ。

原発二十基分の巨費を投じて日本列島に横穴を掘るプロジェクトは、他のいかなる政策課題にも匹敵する公的重要性をもつ。ＪＲ東海という「私」企業の経営に国家が容喙するのは筋違いだと議論が封じられ、リニア建設は二〇一一年五月、大震災のドサクサ紛れにゴーサインが出されてしまった。いったん走り始めた道は最後まで突き進むのが、原爆製造計画をはじめとする巨大プロジェクトの常道なのだ、と悟りすましてはいられない。未来世代の肩にそっくり負担がかかることは、必至なのだ。問題の核心が公然と明らかにされ、市民間で議論が交わされ、万機公論に決すべしの原則が取り戻されねばならない。掘ってダメなら埋めればよい、では済まない。リニア新幹線問題はすでにれっきとした政治的問題であり、アーレントの言うように「政治とは子どもの遊び場ではないからだ」[7]。

テクノロジーが公共の事柄なら、それに関心をもち、その是非を論じるのは市民の務めである。『活動的生』第二章における「公的なもの」の理解が、ここで重みをもってくる。テクノロジーをどう推し進めるべきかに関して、一部の専門家――応用倫理学者も含む――に判断を委ねてはならないのは、それが何にも増して「公的なもの」と化しているからである。私のようなリニア技術のずぶの素人にも、いくらだって議論する資格はある[8]。

もう一つ忘れてならないのは、リニア技術はあくまで日本国内の問題だという点である。世界中でリニア新幹線を建設しようとしている唯我独尊の国のローカルな問題を、真剣に論ずる立場にいるのは、その国の市民だけである。それに、原発問題に匹敵するほど、テクノロジーの本質が隠れひそんでいる、哲学的にこれだけ面白いテーマを、あたかも存在しないかのように、見て見ぬふりをしてやり過ごすのは、あまりに勿体ない。

どうか、一人でも多くの方々が、この公的問題の議論に愉しく参加されんことを。

さて、以上からして、『活動的生』が全体として、つまり序論、第一章、第二章、第三章、第四章、第五章、第六章を通して、現代テクノロジー論に多大な示唆を与えてくれることは、お分かりいただけたことと思う。小論で一番言いたかったことの一つは、これである。

---

[7] Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil* (1963), Penguin Books 1994, p. 279. 大久保和郎訳『イェルサレムのアイヒマン』みすず書房、1969 年、215 頁。

[8] 市民間の議論のうえでの参考文献を挙げておく。橋山禮治郎『必要か、リニア新幹線』岩波書店、2011 年。同『リニア新幹線　巨大プロジェクトの「真実」』集英社新書、2014 年。樫田秀樹『“悪夢の超特急”リニア中央新幹線』旬報社、2014 年。リニア・市民ネット編著『危ないリニア新幹線』緑風出版、2013 年。

●シンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」

アーレント研究を現代に活かすには
――提題を終えて

提題者：石崎恵子（JAXA 宇宙航空研究開発機構 人文・社会科学コーディネーター）

１　はじめに

本シンポジウム登壇のきっかけは、森一郎先生のお仕事に感銘を受け、コンタクトを取ったことだった。「ただし“宇宙的視点”や“宇宙科学”の扱い方には納得が行っていない」と投げかけたところ「日頃の問題意識をぶつけて」宜しいとのことで、今回の運びとなった。当日は、人文学者への要望といった僭越極まりない提題にもかかわらず懐深く対応してくださった森先生はじめ、人文学者の職分について語っていただいた渡名喜先生、そして現代の問題に真摯に向き合う阿部先生、また恐らく予想外の展開を受け止めてくださった会場の皆様に深い感謝を申し述べたい。

当日は次のように 2 つの提題を行なった。即ち、アーレントの宇宙批判をそのままになぞるだけでは、大した効力は持たないのではないかということ、宇宙開発を始めとする科学技術批判をするのであればむしろ「悪の凡庸さ」という洞察をアイヒマン裁判の文脈を越えて現代の問題として捉え返し、それに対する手立てを探る研究をこそして欲しいということ、この 2 点である。その思いは今でも変わらない。そのため、ここで改めて問いかけた上で、さらに試論を加えたい。

確かに、現代の科学技術社会はそのまま突き進んで良いものなのか、という感覚は多くの人々が抱いているだろう。一方で、科学技術を礼賛しその発展を極限まで推し進めたいという思いも存在する。そのような科学技術のポジティブなイメージにしばしば用いられるのは、宇宙開発である。だが、アーレントはこの宇宙開発をして、危険性の象徴的存在として論じていることは時代性の制約があるとはいえ、今でも注目に値する。また確かに「悪の凡庸さ」という言葉は様々な事例に当てはめることが可能ではあるものの、実際に関わったわけではない悲劇に対して、その繊細な文脈を無視して、安易に軽軽に取り上げて議論するべきではないものである。

しかし、人文学の知識が単なるジャーゴン（ある視角から以外には支離滅裂な呪文）に陥ることなく人類の叡智として活かされているとはとても言えない現状はあまりにも惜しい。こうした洞察を現代に活かす手立てはないのか。アーレントの提示した構図は、工夫次第では現代にも変わらず存在する問題圏へ、単なる高みの見物の認識をもたらす以上に、実際に何事かを生み出すための優れたツールともなり得る。そのように解釈することによってのみ「科学の利点」にかき消されてしまう「科学への懸念」にアプローチし、建設的な議論を導くことができる土壌を培うことができるのではないか。

ここで鍵となるのは、恐らく自身の立ち位置に関わるものであろう。森先生はしばしば「アーレントの思想は、自己批判である」とされたが、どの点を指しているのか、確認することが出来なかった。そのため、今回、もし、自己批判であるとすれば、という試論も含めて記すものである。筆者自身は、長らく人文学系の大学院にて、哲学・倫理学を学んできたものである。現在は、この宇宙航空研究開発機構に招聘職員として所属している。正直に言って、どちらに帰属意識があるわけではない。ここでは、主に科学技術組織の側の人間として語る必要があると思われるが、上述のような特異な身分であることから、期待されるような態度、たとえば「科学技術機関の自省」といったシンプルなものとはなり得ないことを申し添えておく。

２　提題１：「宇宙的視点」批判は有効か？

アーレントは、人工衛星の開発や、生命操作、原子力エネルギーといった科学技術を総称して宇宙科学（Universal Science）と呼び、そこはもはや「日常言語が力を失った世界」であるとしているが、こうした批判は、現代社会にも有効なものなのか。アーレントの時代には、冷戦の只中にあって、スプートニク打上げは正に脅威以外の何物でもなかったが、アポロ計画を経て冷戦が崩壊し国際宇宙ステーションにロシアが参加して久しい今、「宇宙的視点」「宇宙人になる」といった言い回しはむしろ、国際協調や平和尊重の文脈で語られることの方が多い。同じ語でほとんど真逆のことを述べているのであれば、もはやその言葉は当時ほどの力を持ちえないのではないか。

アーレントの宇宙科学への批判が有効でない可能性として、以下のような三点を挙げた。一、科学の世界は、数学記号によって一般の人びとには理解不能な言語を中心とする世界であって日常言語が効力を持たない、とされるが、科学技術機関では数学言語が駆使されると共に、日常言語も十全に機能している。その結果が一体何をもたらすかということに比較的盲目的であり得るという官僚制の弊害はあるものの、それをもって「科学の世界は言語が通用しない」すなわち議論の余地がないとは言えないということ、二、哲学用語こそ日常言語とかけ離れているのではないかということ、三、宇宙という「点」に立って思考することは、アーレント自身も行っていることであり、それは地上を改めて捉え返す契機という、むしろ宇宙開発がもたらしたポジティブな効果と共通さえする。「それが科学批判に果たして有効なのか？」ということ。アーレントの博士学位論文である『アウグスティヌスの愛の概念』でも、ギリシャ・ヘレニズムとキリスト教ヘブライイズムでの宇宙観の違いを論じており、やはり宇宙的視点を取るときには、地上の機微が蔑にされるということが問題視されている。この問題意識が、『人間の条件』『活動的生』では、「アルキメデスの点」「宇宙的視点」に立ったかのような宇宙科学批判、へと受け継がれている。

このような「宇宙的視点」批判は、おそらく、専門家の間では、一緒に論じられることはないのだろうと思われるが、あの有名な「悪の凡庸さ」批判とも問題意識を同じくしていると考えられる。

３　提題２：「悪の凡庸さ」という洞察を現代に活かす手立てはあるか？

本シンポジウムの告知文には「今日の科学・技術は「悪の凡庸さ」抜きにしては語りえない」と記されていた。ユダヤ人虐殺施設を指揮したアドルフ・アイヒマンの裁判を傍聴したアーレントが見抜いたその悪は、命令、職務であれば、深く考えることなく遂行されるといった「凡庸さ・陳腐さ」のことであった。これはその後、心理学分野で「アイヒマン実験」とも称される「ミルグラム実験」や「スタンフォード監獄実験」においても一定にみられる現象として証明されている。即ち、役割を与えられた場合に、容易に残忍な命令にも従う傾向が人にはある。

ここまでの思考停止に陥る事態は、現在の JAXA 内部の組織文化に触れてみると、あまり考えにくい。しかし、仕組みとしては全くあり得ないことではない。組織である限り、上からの命令は内実をあまり考えず素直に遂行してしまうことはあり得る。この点について、ここでは私の印象の範囲で、少しく分析してみたい。

まず、ここで言う文化とは、著しく性格の異なる三機関が統合された JAXA においては、一口には規定できないが、共通項も見られる。まず、相違から述べるならば、東大の研究所としての出自をもつ宇宙科学研究所（ISAS）は大学の文化といって差し支えない。この組織は現在も JAXA の一角を担

っている。一方、科学目的以外の実用的な人工衛星の打ち上げが急務となった状況下で政府の特殊法人として設立された宇宙開発事業団（NASDA）が最も統合前の規模としては大きく、ここは法律によって定義された官僚機構の色彩が強い。現在は JAXA 法を下に規定されているため、この性質は JAXA 全体に引き継がれている。そして、戦後初の国産旅客機 YS-11 の開発も担っていた航空宇宙技術研究所（NAL）は研究所としては ISAS との共通性も大きいが、教育は行っていないため、純粋に技術者集団としての文化が濃厚である。

技術者集団という点では、まずもって三機関に共通するものということができる。ある技術者に話を聞いた時にこんな話があった。「どうしても開発は中止すべきという結論が出たらもちろん中止するが、でも、問題点を極力減らして行くのが技術者のやるべきことだ」と。これ自体は、むしろ職業倫理である。そして職業に関わらず、この、良いか悪いかに終始するのではなく、ではどうすれば良いのか、と常に前向きに取り組む姿勢・文化には、哲学研究者も、学ぶべきものがあるのではないか。アーレントは、有名なロケット工学者であるコンスタン・ツィオルコフスキー(1857-1935)やフェルナー・フォン・ブラウン(1912-1977)の言について「陳腐である」旨に言及しているが、それはこうした工学の利点を、無視した言であると言わざるを得ない。ここでのマインドは、あらゆる場面で有用に働かせることの可能な知恵も含まれている。

だがアーレントの指摘は全く不当というわけではない。むしろ政治に利用されるフェーズにおいて問題となって来る事態である。改善して目的を更新して「有用性を証明」して行く、「こんなことにも役立ちます」と、目的を際限なく求めて行く結果、仮に破壊的な結果を同時にもたらすような目的を与えられた時に盲目的にそれに飛びつき、その目的の手段として技術が使われてしまう、という事態、これが「制作する人」の技術のもつ宿命的な構造なのだとアーレントは教えている。

> 制作する人の世界では、一切は、みずからの有用性を証明しなければならず、したがって、自分自身とは別の何かを達成するための手段として使われる。そのような世界では、意味は、何らかの目的と解されるほかはなく、しかも、最終目的ないしは「目的自体」と解されるほかない。（Arendt, H. (1960). VITA ACTIVA oder Vom tätigen Leben, p.184. ハンナ・アーレント著, 森一郎訳,『活動的生』, みすず書房, 2015.）

宇宙開発も、気象、通信、測位と言った実用的な要請をもった開発が既にほぼ達成された今、国威発揚のような大義名分でもって正当化されたという向きもある探査や有人宇宙開発をもふくめて、もはや自己目的化しているのではないかという批判は宇宙開発関係者からも問題提起されている実状がある。

このような時、目的の妥当性が問われるべきだが、それは、一体誰が決めるのか。たとえば「税金を使っていることの責任」。これは、実の所、一枚岩で判断のつくものではない。最後には多数決となるだろうが、多数派の判断が誤った場合はどうか？　つまり、「悪の凡庸さ」と呼び得る事態に至る契機は、現代でも依然、最優先課題として私たちを取り巻いている切実な「経済性」や「社会の要請」といったいわば正当な活動の中にも潜んでいるということである。そして、この時、この目的の妥当性については、問えない、任務ではない、と為される傾向にある。現在の所、その任務は穏健なものであるために、大した問題とはならないが、組織のもつ危うさが何処にあるのか求めるならば、

危険の芽はこうした所にあると特定することができるであろう。だが何度も述べるように、こうした職能の全う自体は美点であり、思考能力を欠いていてはとても完遂することのできないものである。

一方で、大学の文化は非常に特殊である。そこでは任務に囚われず、人として発言することが許されているかのようである。しかし、JAXA の中でも、ISAS における教育職に就く者は大学の文化によって、より自由に発言するが、自分の気の向くこと・利害関係のあることしか発言しないように見える。より自由に発言できる教員が存在したとして、それが、「悪の凡庸さ」を防ぐことができるのかは、疑問である。自身の最大の関心事である宇宙開発の技術を磨けるのであれば、どのような手段をもってしても構わないとする開発への欲求は、アーレントがフォン・ブラウンの内に見出した凡庸さと異なるものではない。それはしかし専門家としてはある程度は致し方ない面もある。誰しもが道徳家というわけではない。もっとも、技術者の中には、自身の開発欲求を満たすためにこそ、結果的に高度に道徳的、倫理的判断を結論するものも存在する。そのような者は社会との接点や文芸への深い関心を有していることがうかがい知れる。すべてがこのように導かれるのであれば、問題はない。だが往々にして自身の関心事にのみ従うという事態は、各分野に閉じた人文・社会科学分野の研究者にも言えることではないか。官僚機構と同様、ここでも「私の任務の範囲ではない」ということばの代わりに「私の専門ではない」という言葉が聞かれる。そのうえ、大学の文化から物事を裁定する際には、どうしても観念的なものとなってしまう傾向がある。そのことをむしろ、アーレントが「宇宙的（普遍的）視点」と警告していると思えてならない。

専門家はそれぞれに一流の頭脳を持っている。上述した弊害はむしろ、置かれた文化・仕組みが人をそのように導いているのであって、それ自体は善でも悪でもない。それぞれに利点もあるが、万能とは言えないだろう。ただ、組織や専門の枠にとらわれることなく、如何に為すべきかを志向する姿勢は、どの立場にあっても、有用性をもつものと考える。そうした文化を活性化させようとする動きが JAXA 内部にも盛り上がりつつある。

４　おわりに

以上、アーレントの思想が、実際に何事かを生み出す力を持つためにはどのような工夫が必要なのかについて試論を行ってきた。

まず、こうした問題について多くの人々が議論を試みることできるのも、何よりも、アーレントの著作物を始めとする文物を正確に翻訳され、紹介されているからこそである。これ自体も生み出されたものということができる。各分野に閉じた議論が知らずに思わしくない方向に向かうことを防ぐには、この重要な仕事があってはじめて可能となる。翻訳とその解釈の正確さは、現実社会を考察する上で最も重要な基礎となるだろう。もしも、その真義が簡潔に人々の人口に膾炙するようになれば、それぞれの立場からおそらくもっと生々しい、活き活きとした事例と共にその洞察が活かされ、現実的な問題解決への原動力となるからである。

また、こうした議論が行える機会自体が引き続き創出されることが何より重要であろう。アーレントは現代社会にとっても、貴重な洞察を提示していることは間違いない。単なるガス抜き以上のものとはならず、解釈問題に終始しがちな傾向を一歩乗り越えた所で、議論の行える場が活性化され、アーレント研究会に所属する先生方の創造的な活動が、更に大きな力となることを願ってやまない。大変微力ながら、今回のシンポジウムへの筆者の参加がそのための一助となっていれば幸甚である。
そこには、保身や自己弁護以上の、共に活きる道、何かより一層崇高な意思が見出されるはずである。

恐らくアーレントが提示するのも、このようなことなのではないだろうか。共に創造する意思という意味では、それは意外にも、工学の利点、善なる美点として上述してきたものとも一致する。物事には善悪の両面があるとされる場合、それは各人の見方に依存する。そしてその各人は環境に影響されているのであり、それが閉鎖的に偏った際に、善は悪にも転化する。従って常に環境の改変を行い、組織の硬直化を防ぐことが何より大切なのだ。問題はその両極があるという知識を得るに留まらず、ましてやそれを恣意的にコウモリのようにご都合主義的に使い分けるのではなく、それではいかにするべきか、に注力することではないだろうか。

●シンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」

アーレントの科学技術批判はなぜ重要か

――「議論」の手前にあるもの

司会・コメンテーター：阿部里加（一橋大学特別研究員）

はじめに

ハンナ・アーレントは日本では、2013 年公開の映画「ハンナ・アーレント」のヒットによりその名を広く知られるようになったが、既に 10 年ほど前から高校の社会科の教科書やセンター試験の問題に載っており若い世代には比較的知られている。他方で、大学の理工学部や技術系専門学校の必修科目「科学技術倫理」の教科書に載っていることはあまり知られていない。学校の教科書の権威云々を言いたいのではない。科学技術をめぐる倫理やモラルのあり方を説いた思想家や哲学者など大勢いるにもかかわらず、なぜアーレントが取り上げられるのか、その理由を考えたいのである。ここでは考える糸口を示そうと思う。

筆者がアーレントの主著『人間の条件』をはじめて読んだのは大学生の頃であったが、まっさきに思い浮かんだのは映画『2001 年宇宙の旅』とレイチェル・カーソンの『沈黙の春』であった。『沈黙の春』は 1962 年、『人間の条件』は 1958 年、ヤスパースの『現代の政治意識――原爆と人間の将来』は 1959 年に出版されている。1964 年にはアーレントは「サイバネティックス」について執筆している。この 1950-60 年代という時代の科学技術にたいする危機感は、二度の世界大戦の反省が戦後の社会に活かされていない焦りと相まって急速に高まり、その危機感が消えぬまま、70 年代には「公害」が各国で起き、80 年代はインターネットの普及により「科学技術社会」が「科学情報技術社会」になり、90 年代以降は世界規模での越境大気汚染が深刻化し、人間の地球外移住を実現すべく宇宙開発が進められている。この間にはスペースシャトル・チャレンジャー号爆発、チェルノブイリ原発事故、福島原発事故が起きている。

時代とともに発展する科学技術の捉え方は色々あるが、大きく言えば、利便性や新規性、享楽の点で諸手を挙げて賛成する以外は、真っ向から否定するか、否定しつつも（仕事等で必要だから）やむなしと甘受し順応するか、無関心でいるか、のいずれかになる。アーレントはといえば、つねに関心を持ちながらどこか冷めた目で見ている。「冷めた」というと反感を抱く読者もおられるであろうが、彼女は科学技術の発展を不可避の現実として捉えたうえで、そこから自らの思索を開始しているということである。「冷めた目」は、この世界に対する重要な態度の一つとして理解しうる。なぜなら、「冷めた目」が現実を直視しているのに対し、直視しないとは、現実を好き勝手に理解し、妄想し、果ては歪曲し（pervert）てしまうからである。アーレントが「危機を見えていても見まいとする態度こそ、現代に特徴的な態度である」と断じるのはこのためである。東日本大震災で福島原子力発電所の建屋が吹き飛んだ際、建屋から白い煙がもくもくと上がっている中継映像がテレビで流れたが、その映像を見た原子物理学者が淡々と繰り返す常套句「この映像がもし本当であるならば、～」に筆者はどことなく違和感を抱いた。「この映像がもし本当ならば」という語は、科学者としての慎重さから発せられたにせよ、想定外のことであるにせよ、目の前で現に起きている事故を他人事と受け止めて直視しない傍観者のようだからである。視聴者は「この科学者にはあの白い煙が見えていないのか？」と不思議に思い、その常套句に続く解説にも空虚さや説得性のなさを感じたにちがいない。

むろん、科学者や開発者だけに原発事故の責めは負わせられない。素人のわれわれにも何時何処かで「見えていても見まいとする態度」がなかったか、責めはある。「見まいとする態度」は「思考停止」と同じく誰にでも起こりうる。だからこそ、この「見て見ぬふり」問題は根が深いのである。では、現実を直視するとはいかなることか。これを考えるうえで無視できないのは、アーレントの最初の夫ギュンター・アンダースと最後の恩師カール・ヤスパースである。三人が共有している視座がある。その最たるものは、現代の科学技術をめぐる危機は過去の危機とは明らかに違う、という視座である。

１ アンダースの「プロメテウス的落差」

シンポジウムで渡名喜庸哲さんが駄洒落として言われた「アーレント・アンダース」は的を射ている。これは、アーレントの思想が別様に（Anders）に語られる可能性があること、そして、彼女の思想が元夫アンダースと別ち難いことを含意している。実際、アンダースの著作の随所にアーレントの「冷めた」思想の端緒が見出せる。以下では、そのうちの一つ、「落差」に注目する。

アンダースは科学技術をめぐる「過去の危機と現代の危機は根本的に違う」と捉える。違うというのは、科学技術が高度に発展したこの世界と人間の間には大きな隔たりがあるということである。この隔たりを彼は「プロメテウス的落差」と呼ぶ。落差とは具体的には、製品世界と人間の間の落差をさす。製品にはリニア新幹線、宇宙ステーション、原発など科学技術の産物すべてが含まれる。自分が造った製品の世界と人間との間の非―同調性が日々増している事実、両者の距離が日ごとに大きくなっている事実、これがアンダースのいう「プロメテウス的落差」である。落差を知るということは、科学技術をたんに否定するのとは異なり、それが現実にわれわれの生活を支配している、という事実そのものを知ることを意味する。そんな事実はとうに知っている、と言うなかれ。落差を知ることにかんし特筆すべきは、アンダースが「今日の科学技術批判に必要な市民的勇気を誇張しないほうがいい」[1]と主張している点である。アーレントの政治的行為や市民的抵抗の思想に慣れ親しんだ人にとって、この点は直ぐには是認し難いであろう。いったい市民的勇気なしに科学技術批判などどうしてできようか、ならば反原発運動には意味がないのか、となるからだ。しかしそれほど、この科学技術世界と人間の落差は凄まじく、それを埋めることは容易ではない、とアンダースは考える。市民的勇気にたいする、こうした突き放したものの言いようは、彼がリルケの研究をしていた頃から、つまりはアーレントと夫婦であった時代から一貫している。アーレントが自身の著作でリルケやカフカを引用するのも、この世界と人間との間に生じている埋めがたい落差と、その落差によって浮かび上がる人間存在に注目するからである。もっともこの落差は、二人ともユダヤ人であることに帰するのではあるが。サミュエル・ベケットが傾聴するのも世界から隔絶したところにある存在者の声であった。

落差は、階級、国、地域を横断しているため、あらゆる人が生産物の製品の犠牲になっている。現代人は自ら生産したものに遅れないように自身を心理的に up to date して追いつこうとするが追いつかず、つねに遅れている。人間のこうした遅れは、生産物に遅れないようにする能力の欠如であると同時に、人間の知性、想像力、理性、感情といった諸能力の限界（Grenze）を示唆しているとアンダースはいう。

---

[1] 先の渡名喜庸哲氏の論考でもこの点が指摘されていた。アンダース『時代おくれの人間――第三次産業革命時代における生の破壊』 青木隆嘉訳、1994 年、6 頁。

> 生産者としての人間は生産物を製造しているわれわれが歩調を合わせられない世界、それを把握するには想像や情緒や責任能力の絶対手の届かない世界をわれわれはもうすでに作り出してしまっているのかもしれない。こういう現代では、人間の限界の批判、人間理性だけでなく想像力や感情や責任という人間能力全体の批判が哲学にとって切実に必要なものになっている。われわれの欠如性から出発せずにもっぱら死から出発する有限性という学界向きの曖昧な思弁では十分ではない。種々の限界が現実のままに映し出されねばならないのだ[2]。

アンダースは時代遅れの落伍者であることを非難しているのではない。時代遅れの落伍者からしか立ち上がらないエチカがあると述べているのだ。時代や生産物に追いつかない落伍者を自覚することは、素人が科学技術に対して物申すためには不可欠な自覚である。それゆえ落差はわれわれに、人間の限界や欠如性を認め、製品世界と人間自身との落差を認めるよう促す。落差の認識なしに現実を直視することは困難である。落差の構造はみな同じで、人の能力が他の能力の後を追いかけるとアンダースはいう。「事実関係をイデオロギー的理論が追いかけるように、想像が製作に遅れをとっている。水素爆弾を製造できても人間は自分が製造したものの結果をまざまざと思い描く力がない。（死者を悼み後悔する）感情も（爆弾で破壊する）行為に後れをとっている。落伍者のように、あらゆるもののはるか後方をノロノロあるいているのが人間の身体なのだ」[3]。アンダースはこのことを、アドルフ・アイヒマンの息子や広島に原爆を投下したパイロットにおける感情や想像力の限界、および、彼らの悔恨に見出している。

問題は、放射能が国境を超えて大気を汚染しているということが人間に認識されない場面、すなわち、この世界のこととしてわれわれに認識されない場面である。落差の概念が効いてくるのは、まさにこの場面である。アンダースは製品世界と人間の間に生じてしまった落差それ自体から、科学技術に支配されない人間のありようを問い直す。ただし、「われわれが」技術をどうするかではなく、「技術が」われわれをどう支配しているかをまずは理解せねばならないと。これは、科学技術の支配という現象に人間が対峙し「冷めた目」で直視することと把握しうる。1950 年代後半には書き終えていたという次の文章は必読である。

> ……以下で論ずるのは、あらゆる地域や政治体制、あるいは政治理論や社会計画とかプログラムから独立した画期的な現代の現象である。ワシントンやモスクワが技術をどう扱うかが問題なのではない。われわれが技術を何とかなしうる以前に、技術がわれわれをどうしたか、現にどうしているか、また今後どうするかが問題なのである。ナポレオンが百五十年前に政治について主張し、マルクスが百年前に経済について主張したのとは別な意味で、技術は、今やわれわれの運命となっているのだ。運命（技術）を導いたり、運命を監視することは不可能であっても、われわれは諦めるわけにはいかない[4]。

---

[2] 前掲書、16-9 頁。

[3] 前掲書、127 頁。

[4] 前掲書、8 頁。

２ ヤスパースの原爆批判

アンダースと同様、ヤスパースも科学技術による支配を不可避の現実として捉えるが、原爆にたいする批判はヤスパースのほうが直接的である。とはいえヤスパースも、原爆をカンタンに廃棄できると言うのはあまりに楽観的だと断じる。彼は『現代の政治意識―原爆と人間の未来』で、現代世界が原爆という怪物といかに対峙しうるかを世界の政治の現状を列挙したうえで論じているが、安易な原爆反対論者にたいし「人間が自分の生活を変化させることなくして、原爆の排除という目標に手を伸ばしても無駄である」[5]と冷たく突き放す。そうして原爆廃棄の困難さを述べることで、開発者や科学者、素人のわれわれに原爆や原発に抗う覚悟を求める。困難さはここでも、原子力という人間の手には追えない産物にたいする人間能力の限界からくる。アンダースは落差において人間の諸能力の限界を述べ、その限界を超えたところに生じる「破局（Katastrophe）」を述べたが、ヤスパースもまた「この地上の破局」を述べている。アーレントが人間を「制限された（Bedingt）」存在と定義するのも人間の能力の限界に拠る、のみならず、この製品世界の限界に拠る。

ところで、限界を知ることは、個人においても組織においてもそれぞれに急務である。しかしこのことは、次の文言を前にして有耶無耶になってはいまいか。すなわち、「科学技術をめぐる事故の殆どは、開発者と同僚および上司との十分な議論や連携により問題を回避できる」という文言である。たしかにそうである。だがそれは、議論や連携が事故を防ぐ最大の砦だ、という意ではけっしてない。むしろ、議論や連携を最大の砦にしてはいけないのだ。科学者や専門家には、素人や市民が立ち入ることのできない領域において、倫理的主体として個人として判断し決断をしなくてはならない局面が必ずある。冒頭の教科書で取り上げられる科学技術倫理の古典『技術倫理』においてウィトベックが、議論の意義を説きつつも科学者の責任と役割を強調するのはこのためである。ヤスパースも、研究者一人に説明責任を求めることは酷であるがそれでもなお、市井の民と専門家の双方の視点を持てるのが研究者であると述べる。人間はか弱い存在なのだから科学者一人に責任を負わせることはできない、だから彼らには期待しないと言えばその端から、「見て見ぬふり」や「思考停止」を許すことになりはしまいか。「思考停止」がおきれば組織ぐるみの暴力や隠ぺいがはたらく。「悪の陳腐さ」は、議論をタテマエにして個人と組織の限界および責任を曖昧にしたうえで、組織としての成果を挙げようとするところから秘密裏に始まる。当事者が「見て見ぬふり」をせず、自ら思考をはたらかせることは事故にかんする内部告発を可能にするだけでなく、内部告発者を組織の圧力から保護するうえでも不可欠である。

「破局」を踏まえたヤスパースの主張を理想論だと言って切り捨てるには早い。STAP 問題を筆頭に、日本の科学技術組織にとっては重く響くはずである。アーレントが、科学者は制作者であるとともに市民であると述べた意義はヤスパースに重なり、「科学者が科学者としての責務を果たす」ことにある。すなわち、科学者がその責任において現実や真実を直視して、真実を歪曲することなく、起きていることを起きているままに伝え、自らの考えを公にすることをさす。これはいかにして可能か。ヤスパースは、市民の力や政治的運動の力とは別に、「自己であること（Selbstsein）」や「政治の外」に立つ重要性を説く。アーレントの科学技術批判で見落としてならない点とは、これらである[6]。

---

[5] ヤスパース『現代の政治意識――原爆と人間の将来 上』 飯島宗享・細尾登訳、1966 年、430 頁。

[6] アーレントも「政治の外」に立つ意義を述べる。阿部里加「この世界を批判する主体はいかにして成り立つか―アーレントの観察の条件」『危機に対峙する思考』、梓出版、2016 年（1 月刊行）、408-428 頁。

人間がこの世界との落差から己の能力の限界や欠如性を自覚しないうちは、「時代遅れ」とも、「廃テク」（「ハイテク」を皮肉った、森一郎さんの言葉）を「廃テク」とも思わない。それには製品世界から独立した思考が必要になる。計算的思考に抗して（哲学的）思考を説くハイデガーを横目に、アーレントは数値や悟性に与しない精神のありようを非依存的な（Unabhängig）ものと定義する。この非依存性は、この世界を「冷めた目」で観察し（Betrachten）、時にこの世界にたいし自ら背を向ける態度を示唆していると筆者は考える。再びこの世界に住むにしても、である。

３　議論の手前にあるもの

JAXA で働く石崎恵子さんが提言された「科学者組織にたいし哲学（者）が果たす役割」が何か真剣に考えねばならないが、アンダース、ヤスパース、アーレントの思想から、「悪の陳腐さ」に抗する仕方を他者のみに委ねることはできない、ということは言える。自己批判なき他者批判の末路は、原子力発電所のメルトダウン・メルトスルーの戦慄を描いた映画「チャイナ・シンドローム」（1979 年）が示すとおりである。素人が科学技術について物申すことが必要であるように、科学技術開発の最先端にいるもの、科学者組織を率いるものは人間的感覚と自己批判が要請される。

そうした科学者の象徴であるカーソンは、有毒な化学物質の垂れ流しによる水中生物の大量死を一人で告発し、アメリカの世論の大バッシングを受けながらも最後は時の大統領を動かした。彼女は真実を究明するさいには人間のセンス・オブ・ワンダー（sense of wonder）が大切だと述べている。このセンスは分かりやすく言えば、子どもの発する純粋無垢な「なぜ？」という問いであり、目の前にあるものを見たままに受け取る力である。だが、科学技術にたいする能動的批判的態度においてはセンス・オブ・ワンダーの先をも見据えねばならない。また、豊かな想像力にも限界があることを知らねばならない。

アーレントが科学者のありようを通じて要請しているのは、結局、われわれの批判的態度である。ヤスパースやアンダースが「限界」を通じて言わんとしたのは、科学技術の産物世界と自己とを「切り分けられる力」であり、目に見えない脅威にたいして人間がはたらかせる「制限づけ」や「限界づけ」の力である。そうした批判的態度や「限界づけ」の力は宗教的にも歴史的にも説明できようが、われわれとしては、知識や情報が縦横無尽に跋扈している現代世界の中でそれらの支配に抗うべく、ぎりぎり限界の状況下で絞りだされる力能と把握するほうが、合点がいく。同じ「限界づけ」の能力を、生産物と人間の落差がそれほどなかった社会において見出すことはできてもどこかでズレが生じるであろう。たとえば、ペットボトルのお茶が味気なく無駄に感じて水筒のお茶を持参したり、インターネットに溢れ流れる情報に追いつこうと必死でいた人がふと我に返り自分には無用だと気付いたりする。これがアンダースの落差であり、ヤスパースの「自己であること」である。

アンダースがいうように、いったん科学技術の恩恵を受け入れた社会は元には戻れない。それゆえ、高度な科学情報技術社会の中で生きながら、科学技術によって完全に支配されることなく人間として生きる技術が必要となる。アーレントの死後、フーコーは「批判とは何か」（1978 年）において「批判とは、一言でいえば、自らの意志によって不服従を求める技術であり、省察を重ねたあげくに不従順になるための技術である」[7]と述べている。この技術をフーコーは「統治されずにいる技術」と呼び、それは「このようにして統治されたくないという意志」であるとしている。「人間の身の丈」を

[7] フーコー「批判とは何か」『私は花火師です』所収、筑摩書房、2008 年、81 頁。

強調するアーレントの思想に、そうした「統治されずにいる技術」がないか、そしてそれは公的な場のみに賭けられているのか、再考する余地はある。

開かれた議論は言うまでもなく今後も必要である。他者と議論することで個人の見解が深まることも事実である。だが、行為（Handeln, action）としての議論はつねに予見不可能であり、取り返しのつかない大惨事や破局をも引き起こす。なぜなら議論には、科学者のみならず素人の市民も自身の思考や責任を途中で放棄して、他者や組織に判断を丸投げするのを許してしまう側面があるからである。科学技術にとって、議論は「悪の陳腐さ」の温床にいつでもなりうる。アーレントはこのことを踏まえてなお、予見不可能な事態を避けるためには、やはり議論する他ないと言いたいのか。否であろう。破局を避けるための議論するさいは、思考停止や事実を「見て見ぬふり」をしない個人が居なければならない。議論の場が用意されるのであればなおさら、専門家として市民として、一人一人が落差や自己と向き合い、覚悟と決意があるか質される。アーレントなら「冷めた目」でそう言うにちがいない[8]。

謝辞

本シンポジウムの企画段階から相談にのっていただいた森一郎さん、アンダースにかんする報告を快諾してくださった渡名喜庸哲さん、シンポジウム後も熱のこもった意見交換をしてくださった石崎恵子さん、そして、シンポジウムに参加いただいた方々に、この場を借りて心より感謝申し上げたい。

[8] 本稿の「冷めた目」はアーレントの「客観的態度」に拘わる。彼女はこれを必ずしも主観（Subjekt）の対としては用いず、この態度の独立性を強調する。この態度は傍観者の態度とは区別されている。

■個人発表①

アーレントとアガンベン
――その権力観の比較考察

和田隆之介（京都大学大学院法学研究科（旧所属））

本報告ではアーレントとアガンベンの権力観の類似性に着目しつつ、両者が提示した権力の否定的側面に焦点を当て、アーレントの意志論のうちにその乗り越えの方途を探った。両者はその権力概念を、アリストテレスの潜勢力（デュナミス）から発展させた。『ホモ・サケル』のアガンベンによれば、近代国家の主権権力は、それに先立って自らを根拠づける「構成する権力」を自らのうちに包含することで成立する。構成する権力は「行わないこともできる」潜勢力として、その現勢態（エネルゲイア）である主権権力（法秩序）のうちに保持されるのである。行わないこともできる潜勢力とは、実現されない、選択されざる可能性を指す。それは、アーレントの表現を用いれば、行為者が何かを始めようと意志する際に切り捨てられる、他でもあり得た可能性である。アーレントが「始まりの原理」に仮託して提示するのも、活動を始める者が権力（潜勢力）を現実化すると同時に実現されざる権力（（非）潜勢力）を生み、それをその現実態のうちに保持する構造である。始める者（主権者）は自らが始まりでありながら（主権のうちに権力を現実化しながら）、始まりを作る者でもある（行わないこともできる潜勢力を生み、保持する）という「論理的に逆説的な課題」を表現したのが「始まりの原理」である。このように、始まりの原理の自家撞着的構造は、アガンベンにおける主権の成立を説明している。

始まりの原理とそれに根ざした彼女の権力論が優れているのは、「始まり」が不意の出来事とそれへの応答との時間的な差異を表現している点にある。P. Markel はこの差異を「時間のねじれ（temporal twist）」と呼んだ。私見ではこのねじれが最も端的に現われる契機が先の主権の成立であり、革命である。革命家はローマの建国のような過去の始まりに応答して活動を始め、不意の出来事を引き起こし、未来の者がこの出来事へと応答する。活動を始めることとそれへの応答は互いにその存立を支え合っている。この両者の差異の表現が「可能性（possibility）」としての始まりであり、活動と応答の双方によって実現される。これを権力の観点からいえば、始める者は権力を現実化し出来事を生じさせるも、「活動のはかない瞬間が過ぎ去った後でも人々を共にとどめておく」潜勢力（デュナミス）をも存続させ、後に活動する者がそれに応答し、再度現実化するのである。始まりの原理とは過去と未来に渡って偏在する可能性、潜勢力であり、この過去と未来への関係が「現在」へと極限まで切り縮むことで、つまり始める者が未来を統制する（権力を現実化して法秩序を創る）始まりでもありながら、その出来事への応答によって始まりを作る（権力を生む）者にもなることで、革命が生じる。以下で見るように、この観点はアガンベンの生政治を時間的構造から説明するものである。

周知のようにアガンベンは、主権が生物学的な意味での生（ゾーエー）を遺棄しつつその主権のうちに例外状態として包含する「生政治」を描いた。それは「行わないこともできる」潜勢力を保持する現実態の構造に対応し、例えば強制収容所として帰結する。同じようにアーレントもモンテスキューやニーチェを参照することで、権力の負の構造を描いていた。未来への行為を意志し選択するに際しては、「後ろ向きに意志できない」「無力という権力への意志」が生じる。その意志は逆説的にも「力能の感情」を生じさせ、衆愚政のような悪をもたらす。先の選択されざる可能性、（非）潜勢力とは、

この必然性に対する無力さの、力能への反転ではないか。これは、行わないこともできる潜勢力が権力の現実態に保存されるアガンベンの権力観に、つまり法適用を外す（行わないこともできる）ことで生を法秩序に包含する主権の構造に対応するように思われる。生政治の悪弊を、アーレントは意志が被る不可逆的な時間の流れから説明したのである。

この時間的構造を明確にするのが、アーレントの解釈するスコトゥスによる偶然性の議論である。偶然性の経験とは、決意の作用において自己の自由を知る、意志する自我の経験である。しかし何かが出鱈目に生じ現存へと至ると、それは偶然性の側面を失い「必然性を装って」現われる。偶然性は積極的に規定され得ず、何かが生じたときに反対の事も「起こり得た（could have occurred）」を意味するだけである。行為の「始まり」の観点から言えば、自由な意志による始まりは「奇跡」（偶然性）の様相を帯びるものの、スコトゥスの議論においては常にすでに必然性のうちに隠れてしまうことになる。

B. Gullì によれば、スコトゥスの偶然性を規定する先の「（反対の事も）起こり得た」は、アガンベンにおける「行わないこともできる」潜勢力に対応する。「引き起こさないこともできたことを直接引き起こす」偶然性は、主権の作用に相当するのである。アガンベンによれば「存在しないことができるという自らの潜勢力」だけが主権者として、現在の自己の存在を基礎づける。アーレントの表現を用いれば、偶然性（主権者）の存在を確証できないのは、自己が常にその存在の一部であることによる。過去のあらゆることは現在の自己の存在にとって常にすでに必要条件となっているのである。力能の感情による自己破壊をもたらす先の意志の無力は、偶然性（起こり得た）が必然性を装うことに対応する。

それゆえこの偶然性は、「存在の創造者」としての「神」の表現である。それは、自己がその存在の一部であるために偶然性を確証できず、自己の非存在（反対の事も起こり得た）を思念できない事態をもたらしうる。この偶然性という「神」は、自由に行為を選択する人間の意志の投影であろう。それは行わないこともできる潜勢力を現勢力のうちに保存してしまう点で両義的なのである。アーレントのいう「内的な意識」の「力・権力（power）」はこのような偶然性に応える力（活動に応答する力）として、過去と未来を往来しながら、必然に対する無力を被る人間に自由をもたらしうるのである。

以上が報告の要旨である。質疑では多くの有意義な問いを頂いたが、ここでは以下の二点を取り上げたい。第一に「時間のねじれ」とはいかなる概念かというものである。「始まり」とは単に時間軸上の一点を指すものではなく、過去や未来を現在へと組み込む仕方で生起するものであり、時間的に「ねじれている」。上記の要旨ではこの点を明確にするよう試みた。第二にゾーエーの議論はアーレントの出生概念といかなる関係にあるかというものである。アーレントのいう「第二の誕生」は、他者との関係を生成する権力の現実化のひとつの表現である。それは自己の非存在の潜勢力を宿す出生を、いわば「例外状態」、「限界」として公的領域のうちに取り込み、必然性に奇跡（偶然性）の相貌をもたらすものであるといえよう。誕生とは自由そのものであり、ゾーエーはビオスのうえに構築されるという F. Colin の解釈が想起される。

■個人発表②

アーレントのM・ヴェーバー社会学批判を問う
――その問題点と理論的意義の導出

河合恭平（川崎市立看護短期大学非常勤講師）

本報告は、アーレントによる同時代の社会科学批判（特に 1940～50 年代）という背景に着目して彼女の議論を読み直し、彼女の理論的貢献を考察する作業の一環である。とりわけ本報告では、同時代のアメリカの社会科学で影響力を持っていた、ヴェーバー社会学の方法論たる価値自由と理念型へのアーレントによる批判を対象とした。そして本論の目的は、①彼女のヴェーバー批判の内容を見たうえで、②その批判の妥当性を検証し、③その検証から得られたものを発展させ、アーレントの諸概念を用いた方法の独自的意義を導出することにある。なお、①と②に関しては、先行研究にあたる P・ビーアに多くを拠りつつ、議論を独自に補強する形をとっている。

では最初に、アーレントによるヴェーバー社会学の方法論批判の内容を確認する。まず価値自由への批判は、「エリック・フェーゲリンへの返答」（1953）でなされているが、論点は大きく 2 点ある。第一に、価値自由の立場で全体主義の強制収容所を論じるとき、それへの憤慨や偏向のないことは「客観的」なのではなく、それへの「許し」を認めることになるという批判であり、第二に、道徳的で感傷的である（価値自由でない）ことが、対象の本質を把握することを妨げるという立場への批判である。対し、彼女からすると全体主義は、テロルを本質とする「先例のない」支配類型であり、それは怒りを避けがたく、人間性に対する犯罪という許されない出来事ということになる。

次に、理念型批判を取り上げる。これは、『全体主義の起源』や「宗教と政治」（1953）に見られる。この批判の主旨は、理念型や機能的等価の考えに典型的に見られるように、ある現象を別のモデルに置き換えることが事象の特異性を陳腐化してしまうという点にある。具体的には、H・ガースがカリスマと官僚制の理念型を全体主義に適用したことが挙げられる。これに対して、アーレントが論じる全体主義の特異性は大きく 2 つある。第一に、全体主義は官僚制の反対物だということである。たとえば、前者は後者と違って、実定法、制度の安定性、行為の予見可能性の余地を認めない。そして第二に、全体主義の運動は指導者のカリスマ性によって作動していたのではないということである。そうではなく、彼女からすればイデオロギーとテロルこそがかかる運動に一貫性を与え、カリスマ性とは無関係に、指導者もその運動に巻き込んでしまうのである。

以上のような価値自由と理念型の問題点ゆえに、これらに依る 40～50 年代アメリカの社会科学のアプローチでは、ナチスが反功利的で自壊的な運動を繰り返したのが、運動そのものを継続させるためであったという特徴を見ることができず、それへの危惧も弱かったとアーレントは考えるのである。

では、以上のアーレントの批判の妥当性を検証してみよう。まず、価値自由の態度は全体主義を「許す」のか。端的に言えば、そんなことはないだろう。ヴェーバーの価値自由は、事実判断から価値判断を導くことを控えるとはいっても、価値判断自体を科学的に扱えないことを決して意味しないためである。たとえば、D・ポイカートはナチスの人種主義とその実践を、T・パーソンズはナチスへの権力集中を、ヴェーバーならば価値自由において批判すると述べている。また、市野川容孝は、価値自由の態度は価値や規範の複数性を承認・肯定し、積極的に開くと論じるが、このことも全体主義のイデオロギーを許さないはずである。したがってアーレントの批判は適切ではない。しかしそれでも、

科学から価値判断を排す限り、科学によって全体主義を批判することを規範として論じることはできないということは言える。実際に、価値自由の態度は全体主義やその潮流に対して無力であった。アーレントが価値自由を批判する理由はここにあるのではないか。つまり、科学による出来事の「理解」とともに危機に抗するべきという点において、アーレントの批判の規範的意義を抽出することができるというわけである（これを【論点１】とする）。

では、理念型批判はどうか。これについては大きく 3 つの論点がある。第一に、理念型には、類型的モデルを用いながら現象の特殊性を見出そうとする面があることをアーレントが理解していないことが言える。たしかにガースやパーソンズが、全体主義をカリスマ的支配や官僚制の枠に当てはめることに終始したという問題はあるが、それは理念型自体の問題ではなく、その活用の失敗と考える方が妥当である。第二に、アーレントは、理念型を用いることが必然的に道徳的後退に繋がると考えてしまっているきらいがある。ただし、アーレントにとってより重要な問題は、理念型を用いた社会科学が全体主義に抗しうるか否かを汲み取る必要はあるだろう。この点は、上述の価値自由批判に連なる。そして第三に、そもそも vita activa などのアーレントの諸概念を、理念型と見ることもできるのではないかということが言える。実際に、アーレントが理念型を評価している箇所は幾つか見られるが、特に「理解と政治」（1954）で論じられている、出来事を捉えるための「予備的理解」の方法はその一例とも言える（これを【論点２】とする）。

以上、アーレントによるヴェーバー批判の検討から、二つの論点が導出された。最後にこの二点を展開させることとしたい。まず、【論点１】から、価値自由を尊重しつつ危機に抗する規範理論としてアーレントの議論の理論的意義が見えてくる。実は、「フェーゲリンへの応答」には、アーレントは価値自由の態度を重んじたからこそ、全体主義を分析することができたと論じている箇所がある。つまり、彼女は危機の特異性について価値自由の下に事実判断をしたが、そこから先は価値自由の伝統と意識的に手を切ることで、危機に抗する規範理論（たとえば公共性の思想や責任論）に向かっている。彼女は、同時代の社会科学批判において、これを意図的に自身の論じ方としていたわけである。

そして、【論点２】からの展開としては、vita activa の三つの営為を取り上げる。これを理念型として用いることで、ヴェーバー等の目的-手段図式による行為論を補い、アーレント独自の政治・社会分析を導き出すことができる。【論点１】に関係させれば、J・ハーバーマスがかかる観点より、「活動」概念からコミュニケーション的行為の理念型を構成し、公共性概念を発展させたことはすでによく知られている。だが、彼女の「活動」の理念型は公共性論以前に、「社会的なもの」を捉えるための枠組みにもなっているのである。「活動」概念は、同時代の社会科学批判を背景に考えると、功利主義や目的-手段図式の行為概念とは異なる観点から社会の諸現象や行為を捉える枠組みであり、このことが社会理論への貢献になりうると筆者は考える。つまりは、「活動」の理念型は、不可逆性、無制限性、予言不可能性、そして何より過程（化）の諸要素に特徴づけられている。これにより、たとえば全体主義のテロルや核分裂のような、人間が目的-手段的にコントロールすることができない無制限で不可逆な「過程」を説明し、問うことを可能にするのである。

質疑応答では、ヴェーバーとアーレントにおける行為の「理解」の仕方の違いが問われた。観点が動機か現象かの違いがある点を応答したが、その場合、彼女の統計学批判にまで押し広めて検討する必要があるとのコメントを得た。また、「理解」と規範理論との関係をつなぐ論拠があいまいであるとのご指摘も受けた。これらはいずれも重要な論点であり、ぜひとも今後の課題としたい。

■個人発表③

「余計者」の廃棄
――アーレントの帝国主義論を再考する

百木漠（日本学術振興会特別研究員PD・立命館大学）

本報告の目的は、アーレントの帝国主義論を「余計者」というキーワードから再検討することであった。周知のとおり、アーレントの帝国主義論は『全体主義の起源』第二部で展開されており、全体主義の前段階としての帝国主義という位置づけがなされている。川崎修が的確に整理しているように、アーレントの帝国主義論は、ホブソンやローザ・ルクセンブルクらの帝国主義研究をベースとしつつ、そこに新たに「人種主義」と「官僚制」という観点を付加した点にその特徴をもっている。

それに加えて本報告が注目したのは、「余剰＝余計（英：superfluous, 独：überflüssig）」なものというキーワードである。この「余計なもの」という概念こそが、アーレントの帝国主義論を貫き、さらには彼女の帝国主義論と全体主義論を媒介する役割を果たしているというのが本報告の基本的な主張である。

まず確認すべきは、イギリスやフランスによって展開された「海外帝国主義」において、それを先導したのが「モッブ」と呼ばれる「全階級・全階層からの脱落者の寄り集まり」であったという記述である。そこには「冒険家や商人、犯罪者や山師などあらゆる種類の敗残者」が含まれるが、注目すべきはアーレントがこれらの人々を「社会の屑（英：refuse, 独：Äbfallen）」あるいは「社会の廃棄物（英：refuse, 独：Auswurf）」と呼び表していたことである。帝国主義とは一般に先進国における余剰な富・労働力を国外の植民地へ排出する運動であったと定義されることが多いが、アーレントはこれを「社会の廃棄物」たるモッブたちを国外へ排出／廃棄する運動として捉え直したのである。海外植民地は余剰な富・労働力の排出先であったと同時に、社会の「余計者」たるモッブたちを廃棄する場所でもあった。

アーレントはこのような海外植民地の典型例としてイギリスに侵略された南アフリカを挙げているが、その地に進出したモッブたちが現地の原住民およびブーア人を支配するための手段として編み出したのが人種主義（レイシズム）であった。のちのナチス支配下におけるユダヤ人迫害に典型的に見られたように、人種主義は、それによって差別される人々（民族）を自動的に「余計者」の位置に貶める構造をもっている。こうして、もともと彼ら自身が社会の「余計者」であったモッブ（帝国主義者）たちによって編み出された人種主義によって、被支配者たる原住民・ブーア人たちもまた「余計者」あるいは「社会の廃棄物」へと貶められることになったのであった。

このような人種主義は、後発国たるドイツやスラブ諸国によって担われた「大陸帝国主義」によってさらに強化され、「汎民族運動」および「種族的ナショナリズム」というかたちへと進化を遂げて、「全体主義」へと引き継がれていくことになる。その過程において、第一次世界大戦後に大量出現した「無国籍者」（難民）たちもまた、「余計者」の一形態であったと捉えることができるだろう。あらゆる国家体制から排除され、「諸権利をもつ権利」を喪失した無国籍者たちは、この世界から「余計者」として扱われる存在に他ならない。このような無国籍者たちの出現への対処策として生み出されたのが「難民収容所」であったという指摘は重要である。なぜなら後の全体主義においては、この「余計者」の位置が「無国籍者」から「ユダヤ人」へと移り変わり、「難民収容所」が「強制収容所」お

よび「絶滅収容所」へと置きかえられていったからである。「無国籍者の現象が全体主義の世界にすでにどれほど類似しているかは、後の強制収容所のことを考えれば分かるだろう」（EUTH, S.597）。

このようにアーレントの帝国主義論および全体主義論では、「余計者」の位置を占める存在が、モッブ→植民地の被支配者（原住民およびブーア人）→無国籍者→ユダヤ人と、次々と移動しながら議論が展開されている。「膨張のための膨張運動」たる帝国主義を駆動する要因となっているのはこの「余計者」の存在であり、膨張運動としての帝国主義はつねにこの「余計者」の排出先・廃棄場所を求め続ける。マルクスが「G－W－G´」という一般定式で示したように、資本は常に「余剰（剰余）」を生み出し続けることによってその自己増殖運動を継続していく。資本主義の発展形態たる帝国主義もまた、先進国における余剰＝余計な富や労働力を国外へ排出（廃棄）することによって、その膨張運動を成し遂げるのである。

その究極形態が帝国主義の先に現れる全体主義であって、そこでは「人間を余計なものにする」ための究極の制度としての絶滅収容所が発明される。そして「過剰人口と〈余計さ〉の問題すべての最上の解決策である強制収容所とガス室が、単に警告としてではなく、範例として残るかもしれないということは考えておかねばならない」（EUTH, S.942-943）。「余計なもの」を廃棄する運動としての全体主義の恐怖は決して今日においても去っておらず、むしろ過剰人口や過剰資本に見られる「余計なもの」の問題は現代社会においていっそう深刻な問題となりつつある。このような社会において、「余剰」な人々を「余計」なものとして廃棄しようとする帝国主義および全体主義の運動が回帰してくる可能性は決して否定することができない。このような示唆をもってアーレントは『全体主義の起源』第三部を締めくくるのである。

ところでアーレントは、先発国による「海外帝国主義」が植民地の獲得によって余剰＝余計な富・労働力の排出に成功したのに対して、後発国による「大陸帝国主義」は植民地を獲得できなかったがゆえに余剰＝余計な富・労働力の排出には失敗したと述べている。しかし帝国主義が「膨張のための膨張運動」として規定されるのであれば、大陸帝国主義においても何がしかの「膨張」は生じていたのではないか。そうであるとすれば大陸帝国主義において「膨張」していたのは一体何であったのか。この問いに対して本報告では、海外帝国主義では（資本の自己増殖運動を引き継ぐかたちでの）「価値的増殖」がなされたのに対して、大陸帝国主義ではこれに代わる「イデオロギー的増殖」がなされたのではないか、という仮説を提示した。すなわち、より純粋な「民族」（あるいは「全体」）を実現するというイデオロギーが加速的に増殖（膨張）し、それが排外主義的な人種主義（汎民族運動・種族的ナショナリズム）を強化していったと捉えることができるのではないか。

しかしこの仮説に対しては質疑応答の時間で、「イデオロギー的増殖といっても具体的に何が増殖しているのかが明確ではない」「どのような指標によってイデオロギーが増殖しているのかを測ることができなければ、価値的増殖と類比することはできない」といった批判的なコメントが複数寄せられた。報告者としてもこの点については、より議論を詰めていく必要があると感じており、仮説設定の妥当性も含めて今後の課題として検討していきたいと考えている。

■個人発表④

物語と意味
――アーレントにおける物語ること

橋爪大輝（東京大学大学院博士課程）

本報告は、アーレントにおいて物語（ること）がもつ意義を、『活動的生』（『人間の条件』）第 25 節を中心に、「歴史の概念」「真理と政治」（『過去と未来のあいだ』所収）や「アイザック・ディネセン」（『暗い時代の人びと』所収）といったテクストにあたり、明らかにすることを目指す。

彼女は一箇の存在者を複数性のなかで捉え、その特殊性が他者との差異において規定されると考えた。それゆえ定義においては、「…とは異なる」ということが言表に含まれると、彼女は言う。ところが、その後すぐさま彼女は、言語は或る者が〈だれか〉を語ることはできないと述べることになる。人間個体を定義することはできない。理由は二つある。まず、（1）定義は類と種差によるが、類はそもそも他者と共通のものであり、種差もまた唯一的なものを表現しないからだ。〈或る者〉が〈だれか〉（人格の唯一性）を語ろうとすると、私たちはただちに「属性」を語りだしてしまうと言われる。（2）他方第二に、言語は定義する対象の一定の本質を捉え、それを固定させるが、人間の〝本質〟は「活きた」ものである。つまり、人間は自発的に「はじめる」存在者であるので、その〝本質〟である〈だれか〉もまた絶えず更新され、固定することがない。言語はそうした動的な〈だれか〉を語りだすことができないのである。こうした困難にたいし、物語ることは、定義の誤りを犯すことなしに意味を開示すると、アーレントは語ることになるのである。

そこで本稿はまず「物語」という「語り」が、どのような特性をもつのか、という点から見ていきたい。すでに述べたとおり、人間は新しいことをはじめる存在者であるとアーレントは考える。このとき、はじまりは過去の存在や出来事から見ると、予測も計算もできない出来事であることになる。因果から自由な出来事は、けれども既存の人間関係の編み目のなかで生起する。したがって、自発的な活動によって生起する出来事と出来事とのあいだは、（因果的には）切断されつつ、（時間的には）接続しているという、いわば〝破線〟的な繋がりを示すことになる。だがこうした非連続的な出来事、「純然たる出来事の、引きうけえない連鎖」の意味を、物語は開示するという。

もう一点つけ加えておくべきことは、アーレントが『精神の生』第一巻において強調しているように、出来事と出来事の関係を考える思考は、「あとから」のものであり、この思考は出来事の精神における反復となる、ということである。

さて、物語は、接続の因果的な根拠に欠けている出来事どうしを結びあわせることになるはずだが、どのようにして結びあわせるのだろうか。アーレント自身の記述はこの点に乏しく、私たちは事象にそくしてこの点について考えなくてはならない。そのさい私たちは野家啓一が『物語の哲学』で展開した物語論を援用することができるだろう。たとえば「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という典型的な物語文において、作戦の提案と味方の勝利という二つの出来事が指示され、先行する出来事が後発の出来事に照らして理解されていると、野家はいう。出来事の有意味性は、複数の出来事を一箇のコンテクストのうちに配置し、その因果関係を設定することをつうじてはじめて生起するのである。つまり物語作者が物語ることにおいて、出来事と出来事を結びあわせることではじめて、出来事どうしの関係も発生するということになるのだ。野家が紹介する「理想的な年代記作

者」というダントーの仮構が、そうした事情を裏側から照らす。この存在は、あらゆる出来事を生起した瞬間に記録する膨大な歴史年表を作りだすことができるが、出来事と出来事を関連させることができない、つまり物語ることができないのだ。

ところでアーレントはまた、物語が「事後的なもの」であることも強調していた。活動の意味が開示されるのは活動が終わってはじめてであり、活動の物語は語り手の回顧的な眼なざしに対してのみ顕わとなる。再び先述の野家の議論を参照するとすれば、別の部隊からの支援要請を無視するかたちで奇襲作戦が強行され、大局な戦略を誤った、ということがあらたに判明したばあい、さきほどは賞賛の対象であった作戦提案の事実は、非難すべき行為に変じることになる。アーレントが、活動の意味は事後に明らかになると述べるのはそれゆえであり、この場合の活動の「終わり」は、物語作者自身が或るていど自由に設定するものということになる。こうして物語の特徴は充分明らかにされた。

以上を踏まえて、物語こそ人格が〈だれか〉を明らかにしうる、という主張を検討する。活動をつうじて共同世界（他者たち）のまえに顕現する人格は、活動するかぎりで持続するという、逃れ去り、はかないものである。はじめる存在者である人格は、絶えず自らを更新しつづけるのだ。一方、この活動は、他者との関係のなかで起こる出来事でもある。出来事は、複数者の活動から成り立つ複合体として見なしうるからだ。このとき出来事どうしを結びあわせることは、或る時点での人格の活動と別時点のそれを結びつけることを意味する。つまり、物語は活動における一瞬の顕現を結びあわせ、一箇の人格全体を構成することができるのである。では、こうした物語は〈だれか〉を語るうえでの困難を克服できているのだろうか。

第一の困難は、言葉による定義では、人格の唯一性を表現できないという点であった。物語は、一箇一箇の自発的な活動を結びつけるが、こうして結びつけられた全体は、それを構成する諸部分（言葉）は一般性をもつにもかかわらず、その結構において唯一的であることができる。他方第二に、活きた人格の本質を言語が語りだすことの困難があったが、これについては物語が事後的に語りだされるということによって克服される。すなわち、物語は究極的には生成を停止した人格、つまり死者について語りだされるものであり、人格の〈だれか〉を物語りうるのは一箇の生が閉じられ、「完成」したのちなのである。こうして物語は人格の〈だれか〉を語りだすのである。

以上の議論にたいし、質疑が行なわれた。主な論点を示しておく。活動において一回一回顕現する人格は、やはりその場かぎりのもので、物語られる〈だれか〉とは別ものではないのか。報告者はこれに、そうした顕現を一箇の人格に総合する可能性をこそ、物語論は示しているように思われると回答した。また、物語が唯一的なのは、人格の個性よりも物語作者の個性を反映しているのではないかと問われた。この点について管見のかぎりアーレントの明確な答えはないと思われ、彼女の関心は物語られる人格のほうに集中している点に報告者は気づかされた。さらに、本報告は人間の活動と出来事を同一視しているが、これは不適切ではないかという疑義が呈された。この点については、『活動的生』においてアーレントが行ないと出来事をほとんど同一視する箇所があることを示し、彼女固有の概念的文脈が存在することを報告者は指摘した。

編集後記

アーレント研究会会報 *Arendt Platz* 創刊号をここにお届けいたします。

最初に会報刊行に至った経緯に触れたいと思います。会報刊行の直接的なきっかけは、昨年（2015年）8月の研究大会1日目が終わった後に、会誌（ジャーナル）か、あるいは活動報告に相当する会報の刊行についてスタッフで話し合ったことにあります。活動成果を形に残し、会の内外にも積極的に報告したいとのスタッフの強い意向があり、会報の刊行が決まりました。そのようななか、続く研究大会2日目も、個人発表、シンポジウムともに大盛況となり、このことが会報刊行の決断をより強固なものにしました。その後、編集補佐を新スタッフの石神真悠子氏にお願いし、事務局長の阿部里加氏を加えた3名での会報編集体制ができあがりました。表紙から中身本文のレイアウトまで、何も無い状態からのスタートで、本当に刊行できるのだろうかと不安が募るばかりでしたが、9月のうちから3人で連絡を取り合いながら少しずつ全体のイメージを固めてまいりました。その後は他のスタッフのサポートを得ながら、こうして何とか刊行にこぎつけることができました。

本会報は、アーレント研究のみで全編構成された研究会報としては国内初ではないかと思われます。その意味で、かなり専門的なアーレント研究の会報であるのは言うまでもありませんが、技術開発現場の研究も含めて、さまざまな分野の研究者の方々からご寄稿いただいており、まさに学際的であり、また専門家と非専門家の立場をこえた多角的な対話といった、本会の創設趣旨が強く反映された仕上がりになったと自負しております。

このたびの刊行におきまして、2015 年度の研究大会のシンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」および個人発表のご報告から、ご執筆いただいた皆様方、また刊行にあたりご協力いただいたスタッフの皆様方、さらに出版に際してご助言をいただいた小泉聡志氏（雑誌編集者）に厚く御礼申し上げます。

今号の会報の主旨としましては、8月の研究大会の活動報告という面がメインになっていたのですが、今後は、よりヴァラエティに富んだ内容のものにして参りたく思っております。たとえば、研究会活動の報告だけでなく、会の創設趣旨にもありますように一般にも開かれた文章やエッセー、アーレント関連新刊書の書評などが計画されています。まだまだ駆け出しの研究会であり、編集体制も決して盤石とは言えませんが、皆様のご助言・ご支援を賜りつつ刊行に尽力して参ります。

（文責：編集長・河合恭平）

Arendt Platz 創刊号

2016年1月10日　発行

編集　アーレント研究会編集長：河合恭平　　編集補佐：石神真悠子

発行　アーレント研究会　http://arendtjapan.wix.com/arendt

事務局　〒470-0136

愛知県日進市竹の山 3-2005

椙山女学園大学人間関係学部心理学科　三浦隆宏研究室内

印刷　株式会社 プリントパック